うたたね姫に目覚めのキスを

るうあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うたたね姫に目覚めのキスを

【Ｎコード】
Ｎ９５４３Ｓ

【作者名】
るうあ

【あらすじ】
「笹岡くん、お願い！　わたしの枕になって！」　唐突な申し出を断る事もできず、彼女に肩を貸している、俺。いったいどうしてこんなことに？　首を傾げつつ、俺は「うたたね姫」の安眠を守ってる。
笹岡と真雪の、まったり夢見心地な恋物語。
【注】基本的に一話読み切りの形式になっています。

うたたね姫に目覚めのキスを　【前】

ふと、思った。

呪いをかけられ百年眠り続ける姫を救い出しにやってきた王子は、ためらい、迷わなかっただろうか。

呪いを解くことができるかどうかではなく、眠りっぱなしの姫を、起してしまうことことに。

起してもいいのだろうか。……自分が、それをしてもいいのだろうか。

迷わないはずがない。迷って当たり前だ。

現に今、俺は迷っている。

――気持ちよさげに眠り続ける彼女を、起すか否かを。

中原真雪（なかはらまゆき）――彼女について説明するのなら、おおよそ一言で済む。特徴に関してもそれは同じだ。

しょっちゅう寝こけている。――その一言に尽きる。

目立つタイプではないが、かといって存在感がないわけでもない。

ただ、いつも居眠りばかりしている。

……いつも、俺の横で。

大学内、俺と同学年で、学部も同じの女子学生は沢山いる。十人、二十人という数ではない。

記憶力は悪い方じゃないが、人の顔を憶えるのは苦手だ。とくに女子は難しい。数日経つと別人のようになっていたり、つるんでいる同性の友人らと似たり寄ったりの格好をしているせいで区別がつ

かなかったりする。
だが、彼女は特別だ。
顔と名前を一発で記憶した。
彼女……中原真雪は、顔立ちはごく平凡で、目を惹く美女というわけでもなければ、強烈で個性的な格好をしているわけでもない。
色白だが不健康そうではなく、柔和で朗らかな顔つきをしている。肩につくかつかないかの髪はやや茶色みがかかっているが、染めた風でもない。これといって目立つ特徴はなく、人ごみに紛れれば、すぐさま見失ってしまうだろう、そんな容姿の女の子だ。
そういう、いわば地味と言ってもいい彼女が俺の記憶に留まったのは、つまるところ、遭遇率と密着度が高かったせいだ。
彼女とは高校も違うし、出身地も遠く離れている。
それがどうしたわけか、今ではすっかり、俺にとって一番身近な女子は「中原真雪」になっている。
同じ学部ということもあって、履修必須課目は当然重なる。他に採った課目も同じ。彼女の授業スケジュールは、俺とほぼ合わさっている。
だから、というわけでもない気がするんだが。
何故かしら彼女と顔を合わせる機会が多くなり、そして現在……
俺は今、彼女に肩を貸している。
彼女は俺の肩に寄りかかり、それはもうぐっすりすやすや、寝入っている。
「……」
春に知り合ったばかりの彼女に肩を貸してやっている俺。
その俺にもたれて寛ぎきっている、彼女。
半年もの間、この調子なのだ。
俺は未だにどう対応していいかわからず、黙然と腕組をし、眉をしかめている。

半年もこんな光景を繰り広げていれば、誤解も生まれるし、噂にも上る。
俺は人目を気にしたいんだが、彼女は寝入っているため、人目は気にならないようだ。
彼女の居眠りタイムは、授業が始まる前、授業中、はたまた授業後だ。……つまり、寝っぱなし。まぁ、稀には起きているが、おかげで俺まで教授や講師、他の学生（ヤツ）らにまで顔を憶えられてしまった。
「いやぁ、いいねぇ、笹岡。その熱々っぷり、半年も経つと見慣れてくるもんだなぁ」
高校時代からの友人、瀬川がからかってくる。俺と彼女が「熱々」でないことを知ってそう煽ってくるのだから性質が悪い。
「ほんと笹岡くん、マユに懐かれてるよね。笹岡くんにもたれかかって寝入っちゃうまでの早さときたら、呆れるくらいだし。マユもすごいけど、笹岡くん、催眠物質放出してない？」
と言って、彼女の友人、岡崎さんはカラカラと笑う。
岡崎さんは瀬川同様、俺と彼女をからかいの的にして、楽しんでいるようだった。とはいえ、からかうのは俺だけだ。彼女をからかっても、「通じないから面白くない」らしい。
「しっかしさぁ、どう見てもおまえら、バカップルだよな。もうフォローできんくらいに」
「いや、してくれ、頼むから」
半年この調子で、実のところ多少俺も現状に慣れてきつつある。懐かれているというのも、その通りだろうと思う。――が、「バカップル」はいただけない。そもそも「カップル」ですらないというのに。
「けどさぁ、ただのオトモダチがそんな風に肩を貸したりするか？」
という瀬川の指摘はもっともだ。俺だとて、そう思う。
それにその答を知りたいのは、当事者たる、俺なのだ。

彼女の居眠りに付き合う、つまり肩を貸すようになったのは、新生活にようやく慣れ始めてきた頃。
春麗らかな、午後のことだった。
教室の後方の席をいち早く陣取っていた俺の横に、一人の女の子がすとんと腰をおろした。見知った顔の女の子ではあったが、親しい間柄というわけではなかった。
彼女はにっこり笑いかけてきたかと思うと、何の脈絡もなく、身体を傾けてきた。
「うん、やっぱりここ！」
いきなり寄りかかられ、さすがに俺はうろたえた。が、とっさに退けることもせず、ただ驚き顔を向けるばかりだった。
彼女は俺の肩先に頭部を預けたまま、満足げなため息をついた。
「は～。よかった、やっとここにたどり着いたよ～」
「は？」
「うん、すっごく楽。気持ちいい。幸せ～……」
狼狽しまくっている俺など、まったくお構いなしだった。
力を抜き、寛ぎきって俺に身体を預けている。
「いや、えっと……中原さん……だっけ？　突然、何？」
小柄な彼女の身体はまったく重くなく、寄りかかられているそれ自体は苦でも嫌でもないんだが、あまりに唐突すぎた。
俺の困惑顔と声を受けて、彼女は一旦身体を離した。
「笹岡くん！」
そして真剣なまなざしを俺に向けて言ったのだ。
「笹岡くん、お願い！　わたしの枕になって！」
「――――……はぁ？」
面食らった。

心底、困窮した。
俺は、鳩が豆鉄砲くらった時より、おそらく間抜けで素っ頓狂な顔と声を、彼女に返したに違いない。
動揺のあまり、何と言葉を返したのか憶えていないという体たらくだ。
だが、否定するようなことは言わなかったのだろう。
以来、俺の肩は彼女専用の「安眠枕」になった。
利用頻度は極めて高く、主に左側の使用率が高かった。
彼女は「枕」具合の良さを熱っぽく語る。もちろん謝辞も忘れない。突拍子も無い彼女だが、律儀な面もある。
「笹岡くんの肩って、ちょうどいいくらいの硬さで、程よく弾力があって、本当に気持ちよく安眠できるの」
彼女は無邪気な笑顔を向けてくる。笑窪のせいでどことなく少女っぽい印象がある。
「こんなに安らげる肩の持ち主って他にいないよ。ね、笹岡くん。これからもわたしの安眠ライフに協力してね」
「……」
小首を傾げ、彼女は俺の顔を覗き込んでくる。
「……笹岡くん、あの、もしかして迷惑？」
俺の沈黙を受け、彼女は不安げな顔を見せる。
「……いや、別に迷惑ってことはないけど」
「ほんと？」
「うん、まぁ」
「よかった！」
途端、光を取り戻したように、彼女は満面の笑顔を浮かべる。
ここでまた俺は、訊くタイミングを逃してしまう。訊きたいことが、その笑顔のせいで霧散してしまう。
「なんだかなぁ……」
俺の呟きは、すでに寝入ってしまった彼女の耳には届かなかった。

俺が常々、彼女は何故こうも寝てばっかりいるのかと疑問に思っているのと同じように、彼女も俺に訊きたいと思っていたことがあったようだ。
「笹岡くん、何かスポーツやってた？」
身体のコリをほぐすように大きく伸びをして深く息を吐き出した後、彼女が訊いてきた。授業後のことだ。この後にひかえている授業がないせいか、何とはなしに俺も彼女も席についたまま、教室を出ようとしなかった。気付けば俺と彼女の二人きりになっていたが、これもよくあることだった。
「上背もあるし、体格いいよね？　けど逆三角形のマッチョ体型ってこともないし」
さすが、半年近く俺の身体に触れていただけのことはある。よく見ているなと、笑いつつ、感心した。
のんびりゆっくりマイペース、といった性格の彼女だが、意外にも目端がきく。観察眼がある、ということかもしれない。
「よく鍛えられてて、全体的にバランスとれてるって感じ」
「ガキの頃から合気道習ってたからな、それでだろう。昔はこれでもかなりのチビだった」
「そうなの？」
彼女は信じられないといった風に目を瞬かせ、俺を凝視する。
四捨五入すれば百八十という長躯の俺だが、中学に上がるまでは、背の順で並ぶ時は一番前にいた。
「合気道、すごいね！」
彼女は感嘆の声を上げるが、俺は平静な口調で合気道は関係ないだろうと返す。
「でも身体を鍛えられたのは合気道なんでしょう？」
「まぁ、それはそうだが」
「だったら身長が伸びたのだって、少しは関係あると思うな。いい

なぁ。わたしも習おうかなぁ、合気道」
「……」
どうやら彼女は、小柄なことに少々コンプレックスを感じているらしい。
「中原、小さいもんな」
いつの頃からか、俺は彼女を呼び捨てにしていた。半年も肩を貸し借りしている間柄なのだから、それも自然の成り行きだろう。
「百五十……ちょい？」
「四捨五入すれば百六十センチはあるよっ」
俺は小さく笑った。からかうつもりはなかったが、彼女はからかわれたと取ったようだ。口を尖らせ、少しばかり拗ねている。
「中原、やっぱりちっさいの気にしてるのか？」
「そんなことないけど」
彼女は俺ではなく、椅子の背もたれに身体を預け、軽く息をついた。
「ただちょっと不便だなって思う事もあるんだ。たとえばここの席からだと黒板全体が見えなくなるとか。段差のある教室とか講堂はいいんだけど、ここみたいな教室だと、どうしても一番後ろの席は黒板を見渡せなくなるんだよね」
なるほど、それはそうだろう。背が低い、つまり座高も低くなるわけだから、前の席に背の高い人が座ると、必然的に黒板は見えにくくなる。
「だったら前の方の席に座ればいいだろう？」
「だって笹岡くん、いつも後方の席にいるんだもん」
「いや、それは」
「うん。それはいいの。笹岡くん、気を遣ってるんだなってわかってるから」
「……」
こうしたところをきっちり見抜いているあたりが、彼女らしかった。

「だったらやっぱりわたしが笹岡くんに合わせるのが一番いいでしょ？」
「俺に合わせる必要、ないだろ？」
「けど笹岡くんいなかったら、わたし、ちゃんと眠れないし」
「いや、学校では、ちゃんと眠らなくてもいいと思うが」
「だって眠いんだもん」
「……中原、夜、しっかり寝てる？」
俺が訊くと、彼女は小さな笑みをこぼした。妙に嬉しそうな顔をしている。
「うん、大丈夫。寝てるよ」
「それでなぜ眠い」
「えー……と、『春眠暁を覚えず』ってとこかな」
「今、秋ですが」
彼女との会話は、大抵こんな調子だ。話が逸れまくり、軌道修正不能なことが往々にしてある。が、無理に話を戻してくることもある。
「う～ん、でもそっか、合気道かぁ。うん、納得」
「何が」
彼女は感心したような、憧れるような目をし、改めて俺を見やる。
「笹岡くんてね、姿勢が正しいっていうか、キレイだなって思ってたの。歩き方も、座ってる時も、楽にしてる時でも、しゃんとして、居ずまいがキレイだなって」
「……」
思わず赤面しそうになる。俺は照れ隠しに眉をひそめてみせた。
俺の渋面を不思議そうに見ながら、しかし彼女はにこにこ笑い、続ける。
「それにね、声もそう。それと眼。落ち着いてて、柔らかいんだけど、鋭さも感じるの。恐くはないんだけど、ちょっとドキッとする、……かな。でも、笹岡くんの声と眼は、深くて優しいよね」
「……」

これは、新手の拷問か？　まさか「褒め殺しの刑」に遭うとは、予想だにしなかった。
他人を、何のてらいもなく褒められるというのは、彼女の美点と言えるだろう。
だが、思わぬ賛辞を受けた俺は返答に窮していた。
「優しい」という形容は、どうにもむず痒く、落ち着かない。
それ以上に俺を落ち着かなくさせたのは、さり気に流した彼女の一言だった。その言葉を聞き、彼女の眼を見た瞬間、俺もどきりとした。
「笹岡くんの肩が心地好いのって、きっと笹岡くんの人柄が出てるからなんだね」
そう言って彼女は、再び俺にもたれかかった。何の警戒心もなく、無防備に。
俺は伸びすぎた前髪を掻きやり、軽く息をついた。
その時だった。
寝入ったとばかり思っていた彼女が、ふいに、声をもらした。とまどいがちな声だった。
「あのね、笹岡くん」
顔を俯かせていたため、彼女の表情は窺い知れなかった。
「あのね」
「なんだ？」
「……んーん。なんでもない」
言葉を切り、彼女は瞼を落とした。
やがて彼女はいつものように寝入ってしまったのだが、この日俺は、彼女を起すタイミングを計るのに、ひどく悩まされた。
俺の口元に微苦笑が浮かぶ。
起すのを躊躇ったのは、これが二度目のことだった。

うたたね姫に目覚めのキスを　【後】

彼女が憶えているかは、わからない。
初めて彼女に肩を貸したのは、入学前のことだ。

あの日はよく晴れていて、風も穏やかだった。
俺は入試のため、大学へと向かうバスに乗っていた。二人がけのシートに座っていた俺の横に、後から乗ってきた小柄な女の子が遠慮がちに腰かけた。
俺はぼんやりと窓の外を眺めていたのだが、ふと身体の左側に重みを感じて目をやると、さっき横に座った女の子が、俺にもたれて寝入っていた。
「……あの、ちょっと」
唖然としながら、一応声をかけた。が、起きる気配はなかった。
心なしか笑んでいるような口元、安らいだ寝息。寛ぎきっている華奢な身体。両手は膝の上で軽く組まれていた。
妙に行儀のいい子だな。それに、なんと気持ち良さそうな寝顔をしているのだろう。
俺は小さく笑った。
この女の子がもし「眠りの森」で眠っているお姫様だとしたら、遥々目覚めさせにやってきた王子も、きっと二の足を踏むに違いない。
起してしまうのがもったいない。このまま寝かせておいてあげたい。
それくらいに幸福そうな寝顔をしていた。
だが、いつまでもそうしているわけにもいかなかった。
あの時俺は、何と言って女の子を起しただろうか。記憶にないが、俺が声をかけると、女の子はぱっちりと目を覚まし、そして驚いた

ことに俺と同じバス停で下車したのだ。
俺と同じ大学の入試に来たのだとわかって、さらに驚いた。
「すみませんでした、ずっと、肩お借りしてしまって。けど、すごく気持ちよかったです。ありがとうございました！」
女の子は深々と頭を下げて礼を言った。笑窪が人懐こい印象を持たせる。
「こんなに気持ちよく眠れたの、久しぶりです。感動……」
「……」
どういたしまして、と言うべきなのか。言いよどみ、俺は困り顔だけを女の子に返していた。
「そうだ、これ」
女の子が俺に差し出したそれは、あめ玉だった。
「ローズヒップのキャンディーです。よかったら」
「ああ、どうも」
「さっきは本当にありがとう。今日、おかげで頑張れそうです。お互い合格して、また会えるといいですね！」
そう言ってから、女の子は勢いよく駆け出した。一度こちらを振り返り、満面の笑顔で大きく手を振ってきた。そして「ありがとう」と繰り返す。
俺はやれやれと肩を竦め、もらったあめ玉を口に放り込んだ。
バラ色の包みにくるまれたあめ玉は、甘酸っぱい味がした。
そして俺は、「また会えるといいですね」、――その言葉を、反芻していた。

朝から降り続けていた雨もようやくあがり、陽射しが雲間からこぼれ始めていた午後、俺は図書館の一角で提出間近の課題を片付け

ていた。なぜか、というよりもはや当然と言った方がいいだろう、彼女、中原真雪も横にいる。そして彼女の友人、岡崎さんもいて、はす向かいに座っていた。
ほんの五分ほど前までは真面目に課題に取り組んでいた俺達だったが、女子二人は早くも脱落した。
「マユ、相変わらず寝るの早いよね。即寝できるってある種才能だよ。ほんと感心するわ」
俺にもたれかかって眠る友人を見、岡崎さんは呆れたように笑う。
「まったくだな」
「けどマユね、ここ最近、夜、よく眠れないって言ってた。昼寝しすぎてるせいもあると思うけど」
「……へぇ？」
俺は改めて彼女の顔を窺い見た。
僅かに聞こえる寝息や髪の毛の隙間から見える寝顔に苦しげな様子はない。だが、そういえば少し疲れたような顔色の悪さがある。心なしかぎこちない寄りかかり方をしている気もする。
「マユの口から眠れないなんて聞くの初めてなんだよね。だからちょっと心配ではあるかな。まぁ、こうして笹岡くんがいれば睡眠不足になるようなことはないと思うけど」
「……」
岡崎さんは何かを期待するような目をして、俺を見る。
俺は返答に窮し、眉をしかめた。おそらく険しい顔をしていたのだろう。岡崎さんはおどけた風に肩を竦め、話題を転じた。
「ところで、ねぇ、マユはどれって答えると思う？」
唐突に、岡崎さんが訊いてきた。小冊子を俺の前に差し出し、そこに記載されている設問に指を当てる。
「この心理ゲーム、ちょっとマユっぽい内容だと思わない？」
見せられたのは、軽いお遊びといった感の心理ゲームだった。

『あなたは「眠りの森」で眠り続けているお姫様。そんなあなたを救い出すためにやって来た王子様が、あなたに目覚めのキスをします。目を覚ましたあなたの第一声は？』

一、「何いきなり。あんた、誰よ？（不審そうに尋ねる）」
二、「ありがとう。待ってましたわ、王子様（にっこり微笑む）」
三、「ぎゃぁぁっ！　このセクハラ男がぁっ！（ビンタを食らわす）」
四、「んー～、あと五分～……（再び布団にもぐりこむ）」

彼女ならどう反応するかなんて、迷うまでもない。
「四だろ」
「四だよね？」
「ん～、あと五分～……」
実際に、今そう言ってるし。
岡崎さんは噴き出し、大いに笑う。図書館ということもあってすぐに声をひそめたが、やはり俺も笑ってしまった。
「ところでそれ、なんの心理ゲーム？」
「あ、これね。あなたの今の恋愛指数、だって。えーっと、ちなみに四を選んだあなたは」
岡崎さんはページを捲り、読み上げた。
「四を選んだあなたの今の恋愛指数は、五十パーセント。目覚めさせてくれる人次第で恋指数は変動します。そして目覚めるかどうかを選ぶのは、あなた次第、だって」
岡崎さんが言い終えたのとほぼ同時に、机の上にあった岡崎さんの携帯電話がブーッという異音とともに動き出した。
「あ、ごめん。あたしそろそろ行かなくちゃ」
岡崎さんは大急ぎで荷物をまとめ、席を立った。彼氏と会う約束をしていたらしい。

「笹岡くん、この後授業は？　マユもないから、ないよね？」
「ああ」
「じゃ、マユ、任せていい？　いつものことだけど」
俺はため息でそれに応えた。
「じゃ、よろしく。それと、笹岡くん」
岡崎さんは意味ありげに笑い、去り際、こう言った。
「笹岡くんなら、マユのこと起せると思うよ」

ブラインドの隙間から、黄金色の光が射し込んでくる。
閉館時間まではまだ時間があるはずだが、気付くと周りの席には誰もおらず、俺と彼女だけが二人、図書館の一角に取り残されていた。
俺はしばし黙って、彼女の寝顔を見ていた。
いつもより少し窮屈そうな顔をして、身体を縮こまらせている。彼女の手は俺のシャツの裾を掴んでいた。もう片方の手は膝の上で軽く握られている。何か持っているようだったが、それが何かはわからない。
軽く息をついて、俺はようやく決心を固めた。
いつまでもこうしていたいという気持ちを、このままではいたくないという気持ちが、凌駕していた。
彼女の額を、指で小突く。
「そろそろ起きてくれないかな、……うたたね姫さん？」
いつもの彼女なら、この程度では目を覚まさない。
ところが今日に限って、ぱっちりと、瞼を開けた。俺にもたれかかったまま、はにかんだ顔を向けてきた。
「入試の日、バスの中でもそう言ったよね。うたたね姫って」
「……」
「うたたね姫ってなんだろって思ったけど、すごく……くすぐった

かったな」
彼女の瞳は、濃く淹れた紅茶の色をしている。おそらくそこには大量の砂糖が投入されていることだろう。甘い香りがたちのぼってくる気さえした。
「あんな風に気持ちよく眠れて、すっきり目覚めたのって、初めてだった」
憶えていたのか、初めて逢った日のことを。
そんな野暮なことは、訊かなかった。
彼女の頬が、僅かに紅潮していた。何か言いたそうに口が開いたが、吐き出されたのは小さなため息だけだった。
彼女は掴んでいたシャツを放し、そして頭をも俺から離そうとした。
とっさ、だった。
俺は彼女の肩を抱き、それを止めた。
彼女はさすがにとまどい、身を硬くして驚き顔を向ける。
「俺、そんなこと言ったんだ。うたたね姫って」
「……うん。憶えてなかった？　まったく同じこと言ったよ。そろそろ起きてくれないかな、うたたね姫さんって」
「忘れてたな」
「そっか」
彼女はしゅんとして、顔を俯かせ、呟くように言った。
「わたしはずっと憶えてたよ。忘れられなかった」
「俺の、この肩の寝心地の良さを？」
「そ、それも、だけど。なんだか、それだけじゃないような気が、ちょっと最近して……」
それでこの頃夜、眠れなかった。そう言って、彼女はようやく顔を上げた。
「どうしてかな」
その理由を知りながら、俺を試すために訊いているのか。
だが疑惑は、すぐに打ち消された。彼女の目には焦らす色もなけ

れば、誘う色もない。
もしかして彼女はまだ眠っているのかもしれない。幼い日のままの夢の中、ゆったりとたゆたっているのかもしれない。
未だ目覚められず、……知りえなかったのかもしれない。
俺と彼女、互いの心に芽生えた、それを。
「憶えてた」
俺は空いている方の手を伸ばし、彼女の頭を撫でつけた。柔らかくて、いい香りがする。
彼女の瞳がためらいがちに揺れる。
「俺も中原のこと、ずっと忘れられずにいた。どうしてかな」
「どうして……かな？」
彼女は微かに笑む。答を、俺に求めているようだった。
頭に置いていた手を、そっと頬へと滑らせる。
彼女のために安眠を提供してきた俺だが、不眠の原因にもなれたようだ。どちらでもあることを、俺は望んでいた。
その俺が、今、彼女のためにできるのは、「目覚め」させること。きっと出来るだろう。
「うたたねのお姫様」
「……」
彼女は目を大きく開き、俺を見つめる。少しばかりたじろいで、身を引こうとしているようだった。だが、拒まれることはなさそうだ。
「そろそろ起こしてもいいよな、……真雪？」
「え……」
彼女の口から「三」の答が出ないことを、そして平手が飛んでこないことを祈りつつ、俺はそっと「目覚めのキス」をした。

コロンと床に、何かが落ちた。

硬直している彼女に代わって、それを拾い上げた。
バラ色の包みの、丸いキャンディー。
それはあの日、彼女が俺にくれたローズヒップのキャンディーだった。
手の中で温められ、表面は僅かに溶けている。
今の彼女そのものだ。
俺は失笑を堪え、訊く。
「目、覚めた？」
彼女は頬を赤らめ、答える。
「……うん、おかげさまで」
笑いつつ、俺は包みを開けてあめ玉を口に放った。
その甘酸っぱさに顔をしかめる。
どうやら恋指数は上向きに変動したようだ。

うたたね姫に目覚めのキスを　【後】（後書き）

注・作中に出てくる「心理ゲーム」は作者（わたし）の創作です。それぞれの「答」は……

一、恋愛指数は４０％　警戒心が強く慎重なあなた　時には肩の力を抜いて気楽に接してみて

二、恋愛指数は２０％　まだまだ夢見がちなあなた　本物の恋に目覚めるのはまだ遠そう

三、恋愛指数は７０％　意地っ張りだけどその実淋しがりやのあなた　素直になれば恋はすぐ目の前

四、作中にて。

なんちゃって。あくまでわたしの勝手想像診断です。

うたたね姫におかしなキスを

やれ試験だレポートだ研究発表だのと、日々勉学に励んでいる（はずの）大学生が、年に一度、やたらと浮かれ開放的になる日がある。

秋に開かれる“大学祭”がその日だ。

当校における大学祭は地域参加型の色合いが濃く、当校の学生ではない、地域住民の一般参加も多数だ。出展者もいれば、単に遊びにやってくるだけの参加者もいる。

一般の参加者が多いためか、出店やイベントも多種多様だ。

お好み焼きといった定番の軽食店もあれば、フリマもある。輪投げや射的といった古く馴染んだ出店もあって、夜祭の屋台さながらだ。他にクイズラリーやミニライブ、さらにはなんとゲートボール大会までである。「老若男女、誰もが楽しめる大学祭！」を目指しているらしい。

今年の大学祭の日程は、十一月の一日から三日までで、十月三十一日は前夜祭に当てられている。合計四日間及ぶ長丁場ともいえる祭だ。

クラブやサークル、同好会といった団体に所属していない俺は、誘われない限り大学祭に参加するつもりはなかった。興味が無いわけではなかったが、バイトに勤しむ予定でいたのだ。

学生向けのワンルームマンションに独り住まいをしている身としては、生活費を稼ぐべく、バイトに精を出したかった。

が、結局のところ終日バイトという予定は立ち消えた。というか、立ち消えにさせた。

「大学祭、楽しみだね！　前夜祭も行きたいな！」

鶴の一声、というやつだろう。

それを言った当の本人―中原真雪は今、俺の左肩に頭を乗せてすやすや寝入っている。

爽やかな風の吹く、秋晴れの午後。キャンパス内の中庭、古びた木製のベンチに座って大学祭に行く計画を立てていたのだが、ほどなくして、真雪は睡眠の粉を瞼にかけられでもしたのか、欠伸を一つしたかと思うと、いつものごとく俺の肩にもたれかかってきて、目を閉じてしまったのだ。

俺は安らぎきっている真雪の寝顔を見やった。

風はあるが、陽射しは暖かい。紅葉し始めている楓の葉が時折風に吹かれ、枝から落ちる。

真雪の頬の方が、艶めいた紅色だ。だが、午後のまぶしい光を受ける楓の葉は清澄な青空に映える。

秋が深まっていくのをしみじみと感じ、嘆息した。

「……」

そして、ベンチの背もたれに無造作にかけていた上着を真雪の肩にかけてから、読みかけの文庫本を開いた。

前夜祭の開始時刻は午後三時からだが、真雪との待ち合わせ時刻は、四時だ。場所は大学の構内、二号館の一階、視聴覚室。

その日、真雪は友人を手伝うため、朝から大学に出かけていた。

真雪自身は俺と同じくクラブやサークルには所属していないのだが、友人が写真部に所属していて、その写真部の出展準備の手伝いを買って出たらしい。

真雪は存外行動的だ。目立ちたがり屋ではないが、積極的といっていいだろう。

どちらかといえば、俺のほうが受動的だ。真雪に対しては後手に回ることが多い。情けなくもあるが、いやではない。俗に言う、「惚れた弱み」というやつだろうか。

その惚れた相手に会いに行くべく、俺は待ち合わせ場所へといそ

いそ出向いている、という次第だ。
待ち合わせ場所の二号館は、前夜祭のメイン会場から少しばかり離れているせいもあって、少々閑散としていた。まだ準備が整っていないらしい雰囲気が、そこかしこに流れている。
写真部の展示会が開かれる視聴覚室は、一階の北端、階段横だ。ドアは開けっぱなしになっていて、中から賑やかな笑い声が聞こえてくる。
俺は別段躊躇うでもなく、中に入った。
「お、笹岡くんじゃん」
俺の来訪に気づき、声をかけてきたのは真雪の友人、相田さんだ。格闘家もかくやという、女子にしてはごついといっていい体つきの相田さんは、一眼レフのカメラを肩からさげ、望遠レンズとおぼしき筒状の物を手にしていた。相田さんはそれを受付のテーブルに置くと、
「まゆー！　笹岡くん来たよーっ！」
と、大声で真雪を呼ばわった。そんなに大声をださなくても……というほどの声量だ。
さほど広くもない部屋、展示用の衝立の向こう側にいるらしい真雪の耳に、相田さんの声はしっかり届いたようだ。
「はーい」
という返事が聞こえ、すぐにぱたぱたという足音ともに、真雪は姿を現した。

真雪はめずらしく髪を結っていた。肩に毛先がつく程度の長さの髪を二つにわけ、結んでいる。そのせいで童顔がさらに幼く見え、とても大学生には見えない。服装のせいもあるかもしれない。白いカットソーの上に細かい星柄のチュニックを重ね、その下はジーンズだ。カジュアルというよりはラフな格好だ。
真雪は小走りになって俺の元に駆けて来る。
つぶらな瞳の仔犬がまっしぐらに駆けて来る……。そんな錯覚を

起させる真雪だ。
「来るの、早かったか？」
「ううん、そんなことないよ。作品の展示も飾りつけもほぼ終わったし」
真雪は藍色のジャケットを羽織りつつ言い、それから「あっ、そうだ」と顔を相田さんに向けた。
「アイちゃん、あれ、笹岡くんにも確認してもらわなきゃって言ってたよね？」
「あ、そうか！　そうだったそうだった、またころっと忘れてたよ」
アイちゃんこと相田さんはポンッと手を打った。
「笹岡くんにさ、見てもらいたいもんがあったんだよ」
「俺に？」
「そう。ちょっとこっち来てくれる？」
そう言って顎をしゃくると、相田さんはさっさと歩き出した。その後を真雪もちょこまかとした足取りでついてゆく。
なんだと不思議に思いながら、俺は二人の後についていった。
「これなんだけど」
相田さんはある一枚のパネルの前で足を止めた。
パネルのすぐ下には写真のタイトルと撮影者の名が貼られている。写真のタイトルは『午後のうたた寝』。そして撮影者は相田さんだった。
「我ながらいい感じに撮れたと思うんだよね。さり気なく撮った写真なんだけど、そのさり気なさが上手く出てるっていうか。いかにも平和な日常風景って感じで」
撮影者の相田さんは、照れもなく、自画自賛している。
なるほど、奇抜で斬新といった構図の写真ではないが、ありふれた日常風景がきれいに、そして温かな色合いで写し撮られている。なにやら観ている者の心を和ませるような、そんな写真だ。
場所は、当校のキャンパス内、芝生の敷かれた中庭だ。午後のまぶしい陽射しが降りそそぎ、紅く色づき始めている楓が舞い、散り

落ちている。写真の中央よりやや右の方、背もたれのある木製のベンチに腰かけている男と女がいる。視線が、その二人に自然と流れるような構図だ。
上背のある男は、文庫本か何かを読んでいるのだろうか、視線を下に落としている。そして男の真横に座っている小柄な女は、男の左肩にもたれかかり、写真のタイトル通りに『うたた寝』をしている。
――って、これ、俺と真雪か！？
訊くまでもなかった。
相田さんは満足げな笑みを浮かべているし、真雪までが嬉しげに微笑んでいる。
背後からの写真で、距離をおいたところからの撮影だから、顔ははっきりと写っていない。だが、友人知人なら、俺と真雪の二人とだと分かるだろう。というか、丸分かりだ。
「のほほ～んとした雰囲気がよく出てるでしょ？　癒し系の、いい写真だと思わない？」
相田さんに同意を求められたが、「そうだな」と素直には首肯できない。が、否定もできない。照れくさいという感情は、眉間の皺という形となって表れた。
たしかに、いい写真だと思う。
秋の陽射しの爽やかさと、どこか懐かしげな楓の色、そして当たり前のごとく寄り添い合っている一組の男女。ありふれた風景写真だが、目を惹く。
相田さんは少しばかり心配げな顔をして、俺の顔を覗き込んできた。
「まゆには、展示してもいいって許可を貰ってたんだけど、笹岡くんに許可を貰うの忘れてた。気に入らないってんなら、下げるけど？」
「……」
即答しかねたが、

「わたしも笹岡くんに言うのすっかり忘れてて。ごめんね？　でも、笹岡くんも気に入ってくれると思ったの」
真雪に同意を求められたら、結局は断われるはずもない。
「いいよ、好きにしてくれて」
つっけんどんな物言いになってしまったが、真雪も相田さんも、俺の気持ちを少しは察してくれたようだ。二人は声を揃えて「ありがとう！」と言い、互いの両手を打ち鳴らして喜んだ。

相田さんは、友人の彼氏である俺の機嫌を損ねたくない一心なのか、あるいは単に本心からなのか、やたらと俺を褒めてくる。俺の“身体”を。
「笹岡くんってさぁ、いい体つきしてるよね。合気道やってるってまゆから聞いたけど、姿勢がいいのはやっぱその影響かな」
……類は友を呼ぶ、というやつか？
真雪と相田さんは、妙なところで（つまり俺の身体のことだ）意気投合している。
相田さんは俺の背をばしばし叩き、満足げに相槌をうっている。俺の困惑顔など、まったく意に介さない。
「う～ん、いい筋肉。脱いだらすごいんです？」
と、からかうように笑って、俺ではなく真雪に話題をふった。
さすがの真雪もこれには赤面し、言葉を濁した。
「や、それは、そのなんていうか、えっと……っ」
「まゆ～？　その反応はさらにツッコミたくなる反応だぞ？　ま、いいや。それは今後の楽しみにとっておくとして。ねぇ、笹岡くんさぁ」
相田さんはマイペースだ。赤くなっている真雪をからかうのもそこそこに、また俺に話を戻してきた。
「モデルになってくれない？　や、これ、あたしだけじゃなくて、美術部の友達からも頼まれてることなんだけど」

「モデル？」
俺はいかにも胡散臭げに訊き返した。
「そ。もちろん裸体の！！」
「……」
思わず口元が歪んだ。声も出ない。
「撮影意欲が湧く被写体ってなかなかいなくってさぁ。友達もね、ほら、ミケランジェロのダビデ像ってあるでしょ？　ああいった人体の彫刻に挑戦してみたいって言ってるんだよね。けど、想像だけじゃなかなか形に表わせないらしくって。やっぱ本物の筋肉見てじゃないと」
「いやちょっと……」
たまりかねて俺はストップをかけたが、相田さんの創作語りは止まらない。
「あたしの場合は写真なんだけど、ヌードってね、やっぱり究極の美だと思うのよ。風景写真とは違った自然の美が、ヌードにはあると思うんだ。けど、なかなかそういう美を感じる体の持ち主に出会えないんだよねぇ。鍛えられ、引き締まって、均整のとれた体躯の持ち主なんて、身近にはそうはいないもんだよ。と・こ・ろ・が！」
相田さんは顔をぐっと迫らせてくる。がっしりとした体格の相田さんは、身長こそ俺に及ばないとはいえ、横幅だけなら俺に負けない。その体が迫ってくるのだ。俺はたじろぎ、僅かに後ずさりをした。
「いたよ、ここに！　まゆ、あんたいい彼氏見つけた！」
いい彼氏って、……それどんな基準での「いい彼氏」だよ？
それに真雪。なんでそうにこやかにしていられるんだ？　嫌な顔をしろとは言わないが、少しは迷惑そうな顔をしてもいいことだと思うぞ？
「笹岡くん、すごいね！」
とか喜んでる場合ではないだろう、「彼女」としては！
「そんなわけで、モデル引き受けてくれたら嬉しいんだけどなぁ、

あたし的にも、美術部の友達もしても」
相田さんはすっかりその気になっている。目が輝いてる。真雪までが、期待をこめて、きらきらと。
「いやいやいや、勘弁してくれ、それだけは！」
俺ははっきりすっぱり、断わった。
相田さんは「ちぇーっ」と口を尖らせた。が、わりにあっさりと諦めてくれた。今ここで俺の機嫌を損ねるのはマズいと判断したのかもしれない。
真雪も諦めてはくれたが、
「笹岡くんの写真、欲しかったなぁ……」
と、しょんぼり顔で呟いた。

写真部の展示室に長居するのはキケンと察知した俺は、真雪の手を引き、そそくさと逃げ出した。
相田さんは、
「気が変わったらいつでも言ってねー」
と言って名残惜しげに手を振る。俺は愛想笑いを返しはしたが、内心、気なんか変わるかとぼやいていた。
真雪も懲りずに、
「もしその気になったら、絶対わたしにも声かけてね。そしたら笹岡くんの写真、アイちゃんに頼んでもらうんだから！　ね？！」
絶対だよ、と念を押してくる始末だ。
「まいったな……」
まったく真雪には、振り回されっぱなしだ。
それがまた悪い気分じゃないんだから、俺も相当まいってるな、真雪に。
自嘲気味な笑いとため息が、こぼれ出た。
真雪はちょっと心配そうに、だが目元に微笑を残したまま、俺の顔を覗き込んでくる。

「あのね、笹岡くん。アイちゃんが撮ったあのパネルの写真、焼き増ししてくれるって」
「あ、ああ、そっか」
「……もしかして、やっぱり迷惑だった？　言いにくかったっていうなら、わたしからアイちゃんに言っておくよ？」
真雪は不安げな色を顔に浮かばせた。
「いや、あの写真はいいんだが……」
「ほんと？　よかったぁ。あの写真ね、わたしもすっごく気に入ってるんだ！　アイちゃんね、普段は風景写真ってあんまり撮らないんだって。だけど新境地を拓きたくてあっちこっち風景写真撮りまくってたんだけど、納得いかなくて、それで悩んでたところに、ふとあの光景が目に入ったんだって」
真雪は上機嫌だった。そのせいか、いつになく饒舌だ。
「それで何気なく撮ったら、自分でも納得のいくいい写真が撮れたんだって」
俺は相槌をうちながら、真雪のお喋りにつきあっている。
「でね、アイちゃんが、笹岡くんにありがとうって言っておいてって」
「俺に？」
「うん。なんかよくわかんないけど、あの写真をきっかけにスランプから脱出できたからって」
「そうか」
何をしたわけでもないのに感謝されるのは妙な気分だが、礼を言われて悪い気はしない。よかったな、と俺が返すと、真雪も頷き、よかったよね、と笑った。
「あ、それでね。アイちゃんからこれ貰ったんだ。ほら、今日って三十一日でしょって」
真雪は小さなキューブ型のバッグから、相田さんにもらったというそれを取り出した。
「はい。笹岡くん、嫌いじゃないといいけど」

「……なんだ？」
手渡されたのは、チョコレートだった。かぼちゃの絵の描かれた、一口サイズのチョコレート。それが三つ、俺の手の中にある。
「今日って、ハロウィンだもんね。それでかぼちゃのチョコとか飴とかパイとかクッキーとか、いろいろ貰ったんだ」
真雪は片手を頬に当て、ほくほくと笑っている。なんでも、手伝ってくれたお礼らしい。子供の駄賃のようなお礼だが、真雪は気分を害するどころか、素直に喜んでいる。
そう、今日十月三十一日は、ハロウィンだ。
そういえば前夜祭の会場はハロウィン仕様の飾り付けになっていたな。かぼちゃのランタン、ドクロのオブジェやオバケのオーナメントなどなど、派手なお化け屋敷のような雰囲気になっていた。
ハロウィンだからといって、まさか本当に、「お菓子をくれなきゃ悪戯するぞ」と言って家々を回るなんてこともできないから、せめて雰囲気だけでも楽しもうという風潮が日本にはあるようだ。菓子屋のささやかな商戦が繰り広げられてもいる。
真雪は思いだし笑いを浮かべて言った。
「そうそう、わたし子供の頃ね、ハロウィンってかぼちゃを食べる日だって思ってたの。ハロウィンにかぼちゃを食べないと風邪をひくぞって」
真雪らしい勘違いに、俺は口元をほころばせた。
「かぼちゃを食べなきゃ風邪をひかすぞ、って？」
「うん、そうそう。でもそれって冬至だよね？　風邪と中風予防のため……だったかな？　ね、笹岡くんは、かぼちゃって好き？」
「ああ、そうだな、嫌いじゃない」
「そっか、よかった。それじゃあ今度の冬至、かぼちゃの煮つけ、作ってくるね！」
「ああ」
ハロウィン用のお菓子を用意できなくて、ごめんね、と真雪は言う。どうやら、ハロウィンの祭に便乗して、何かしたい気持ちがあ

ったらしい。その「何か」を具体的には決めていなかったようだが、せめてお菓子くらい作ってくればよかったなぁと呟いていた。
真雪の手を握ったまま歩いていたのだが、ふと足を止め、真雪の手を離した。
「なぁ、真雪？　今日はハロウィンなんだよな？」
「うん……？」
真雪は目を瞬かせ、きょとんとした顔を俺に向ける。
「で、ハロウィンといえばたしかこう言うんだよな？」
「え？」
「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ」
俺はもらったかぼちゃ味のチョコを口の中に放り入れた。そして真雪の頬を両手で挟み、甘ったるい菓子を口移しに、与えた。

真雪には、驚き、焦らされてばかりだ。
これくらいの“仕返し”はしたってもいいよな？
俺はしたり顔で笑った。

真雪は大げさなくらいに照れまくり、俺の胸をぽかぽか叩いている。
ふと見ると、暮れなずむ空の茜色が、真雪の頬に写っていた。

うたたね姫にやさしいキスを

あっけなかった。

「真雪、今度の……二十四日の夜は、何か予定入ってるか？」

できるかぎりさりげなく、気負いを隠してさらりと訊いた。

訊かれた俺の“彼女”はいかにも眠たげなぼんやり顔をしていたが、笑窪を見せて、答えた。

「うん、バイト入ってるよ」

じつにあっさりと。躊躇もなく。

「……そうか」

ゆえに俺もあっさり引き下がるしかなかった。

クリスマスイブまであと一週間。

もっと早くに誘いをかけておくべきだったかと悔やんでみても、今さらもう後の祭、というやつだ。

室温の下がりつつある日暮れ間近の閑散としたキャンパス内のカフェテリア。

俺の左肩にもたれかかっている真雪は、さっきまでそうしていたように再び瞼を閉じ、やがてすぅすぅと安らぎきった寝息をたてはじめた。俺のついた空しいため息をきくことなく。

そしてあっけなく、クリスマス前夜は終わろうとしていた。

冬季の休み期間中は、ほとんどバイトが入っている。それは真雪も同様だ。

真雪のバイト先は、パン屋だ。真雪は実家から通学しているのだが、その実家の近くのパン屋で売り子をしている。ケーキ屋ほどで

はないにしろ、クリスマスイブの今夜、パン屋もそれなりに忙しいらしい。冬休み限定の短期間バイトで、大晦日まで働くと言っていた。元旦から三日までは休みで、その後数日働いて、短期バイト終了、とのことだ。

そして俺のバイト先は、レンタルショップ。一人住まいをしているアパートから徒歩十分ほどのところにある。レンタルショップにクリスマスはさほどの影響力を持たないが、それ以前に冬休みだ。来客数もそこそこ増え、賑わっている。

「そういえば、店の近くの森林公園なんだけど、クリスマスのイルミネーション、けっこうキレイらしいよ」

ふと、昨日バイト仲間が言っていたことを思いだした。

森林公園は、うちの店から徒歩十分ほどのところにある。こんもりとした丘陵地にある公園は、まだ一度も行ったことがない。が、案内板によると、多目的利用のための広いグラウンドがあったり、森の中を散策できる遊歩道があったり、釣りもできるため池があったりと、広い敷地内にさまざまな場が設けてあるようだ。

その森林公園で、二十三日の祝日から二十五日までの間、クリスマスのライトアップが行なわれているらしい。

田舎町のことだから、やれライトアップだイルミネーションだといっても、さほどのことはないだろう。しかしそれなりに集客力はあるようで、駐車場はもういっぱいになっているらしい。そのせいで、うちの店の駐車場に車を停めて行くやつらも、多々いる。表向きは、「来客者以外の駐車はご遠慮ください」なのだが、店側としては黙認するしかない。ついでに店に寄る客も、ないではないからだ。

そんなことをぼんやりと考えていると、バイトの先輩から冷やかしのつっこみが入った。

「今日は休みとらなくてよかったのか、笹岡？　クリスマスイブだぜ？」

「……」

俺はむっつりと口を噤んだ。
先輩はにったり笑い、にじり寄ってきた。
ちょっとでっぷりとした先輩と並んでいると、狭いカウンター内がさらに狭い。俺はさり気なく半歩後退し、先輩との間に距離を置いた。もっとも、囲われたカウンターの中では避けようにも限度がある。
「なんだよ、彼女と喧嘩でもしたのか？」
俺が彼女持ちと知っている先輩は、やっかみからなのか、今日はやたらと絡んでくる。
「別に喧嘩なんてしてませんよ」
「そのわりに不機嫌じゃね？　一応接客業なんだぜ？　その仏頂面なんとかしたらどうよ」
「すみません、これ、地顔なんで」
「いやいやいや、普段比三割り増しで仏頂面だぜ？　はい、スマイルスマイル！　スマイル無料レンタル中～」
「先輩、それ店違いますから」
もとはたしか、０円だ。
無料レンタルなんぞされてやるかと、さらに眉間に力みを入れて、しかめっ面を返した。
「もういい加減にしないと、店長にどやされますよ。私語は慎みましょう、先輩」
そうしてから、俺はいかにも真面目なバイト店員らしいことを言って、さっさとレジ前に戻った。

クリスマスイブなだけに、店内に流れる音楽はクリスマスソングの繰り返しで、ついでにいえば店頭には子供の背丈程度の小ぶりなクリスマスツリーが置いてある。ガラス戸にはもこもことした白いスプレーが吹き付けてあって、雪だるまだの雪の結晶だのトナカイだのサンタだの、いかにもクリスマス的なイラストが散らばってい

る。
　そして店員までサンタのコスプレ（といっても赤い帽子とメリークリスマスのロゴの入った赤いエプロン着用、というだけなので、サンタクロースというには中途半端なのだが）をさせられているという悪ノリぶりだ。
「店長の趣味だからねぇ。まぁ、全身サンタコスよりマシじゃね？　この赤い帽子だけなんだから。けど、女子オンリー、全身コスでもいいんだけどなぁ。できればミニスカで」
「先輩、それ、セクハラです。っていうかここレンタルショップですから、サンタのコスプレしてもあんま意味ないと思いますけど」
　先輩はしみじみと、白い房が先っちょについた赤い帽子を半端にかぶっている俺を眺め、「しっかし笹岡はデカいから、すっげぇ目立つな」と言った。「付け髭もつけとくか？」とも。
「……」
　苦虫が口の中で何匹も跳ね回っている。噛めば噛むほど苦味が増して、顔はどうしても渋面になる。いっそ白い付け髭を装着しておけばよかったかもしれない。
　今日だけでいったい何度ため息をこぼしただろうか。それでも業務は滞りなく、淡々と続けた。
　現在八時を少し回ったところだ。
　別段気落ちはしていないが、やはり、少しばかり落ち着かない。やたらと時計が気にかかり、時間が過ぎるのが遅く感じる。
　今日のバイトは八時半までだ。あと三十分もないが、すぐにも帰りたい気分だった。

　早く帰りたい、と思うときに限って、それはうまくゆかないことが多い。
　結局三十分ほどバイト時間を延長させられるはめになり、サンタのコスプレ衣装をぬいで店を出られたのは、九時を十分も回ってからになった。

空に月はなく、ところどころに雲がかかっていた。が、雨や雪が降りそうな気配はない。寒いには寒いが、肌が切られるような寒さではない。それでも吐く息は白く、ため息をつくたび白い煙が目の前でもやもやと揺らいだ。
俺はおもむろに、ダウンジャケットのポケットに入れたままにしておいたケータイを取り出した。
（ん？　メールか？）
緑色の光が点滅していて、メールの着信があったことを報せている。そして、それに気づいたのとほぼ同時だった。
「笹岡くん」
背後から声をかけられ、俺はぎょっとして振り返った。
レンタルショップの出入り口のすぐ脇にある自動販売機、その横から遠慮がちにそっと顔を出したのは、赤いダッフルコートを着た小柄な女の子だ。おずおずと、俺の顔を覗き込んでくる。
サンタクロースのコスプレをした女の子ではなく、
「こ、こんばんは、笹岡くん」
まさかの、真雪だった。

まったく、真雪はいつでも俺を驚かせる。が、本人にそのつもりはないようだ。
俺が気づかなかっただけで、メールも送ってくれていたらしい。慌ててそれを確認した俺は、さらに焦った。
「もしかして、ずっと外で待ってたのか？」
「ううん」
慌てているのは、どうやら真雪も同じらしい。ふるふると首を横に振った。
「店内にもちょっとの間入ってたよ。けど笹岡くん、バイト中だし、接客してたから、声かけられなくて」
「……ああ、そっか」

「バイト、八時半までだって聞いてたから、それまで中で待ってようかなって思ってたんだけど」
その間に、どうやらメールを送ったらしい。
「そうか、気づかなくて悪かったな」
「ううん」
真雪はベージュ色のマフラーを巻きなおし、ちょっと肩をすくめた。視線を落とし、顔も俯かせて、しおらしくしている。真雪は肩から提げているバックとは別に、カーキ色の紙袋を持っていた。その紙袋を気にしている風でもあった。
「ん、と……、ごめんね？　急に押しかけてきちゃって……あの、め……」
「真雪」
俺はさっと手を伸ばし、真雪の頬に触れた。思っていた通り、真雪の頬は冷たい。真雪はハッとしたように目を瞬かせ、俺を見つめ返してきた。
「待っててくれてありがとな、真雪」
「う、うん」
ちょっととまどったような、だが安堵した色のある、無防備な瞳だ。その瞳がじっと俺を見つめて、微笑んでいる。ひたむきに見つめてくる真雪のまなざしに、鼓動が少し速まった。心臓は、こういう時実に素直に反応する。
真雪は俺の手の熱を心地好く感じているらしく、口元を緩ませて言った。
「笹岡くんの手、あったかいね」
そして無防備な真雪は、俺よりもずっと積極的だ。
「あの、ね、笹岡くん。えっと、その……よかったら、一緒に森林公園のイルミネーション、観にいかない？」

かくして、俺と真雪は世間並みのカップルのように、二人寄り添って歩き、評判以上にゴージャスなクリスマスのイルミネーションを眺めている。

三角錐に剪定された樅に似た木に、らせん状にまきつけてある白いライトは、まるで雪が降り積んでいるかのようでなかなか幻想的だ。白いライトに装飾された木が並び、ホワイトクリスマスの雰囲気を演出している。他に、星の形の電飾がチカチカ点滅したり、トナカイとサンタの形に配された電球が、夜空を走るかのように点滅していたり、低木の植え込みに、長く配されたライトが波打つように色を変化させたりと、華やかな飾り付けが公園の広場へ至る道からずらりと施してある。

瞬いているＬＥＤライトの色は、白や赤、他に緑や青、紫などがあり、形も様々だ。夜の闇を寄せ付けないほどに明るく、華やいでいた。

「すっごくキレイだね！　花が咲いてるみたい！」

真雪は無邪気に喜び、何度となく感嘆の声をあげた。

俺は俺で、そんな真雪を見て内心ホッとしていたし、やはり嬉しかった。

俺の表情が緩んでいるのに、真雪も気がついたらしい。ライトは、表情を隠せないほど明るかった。真雪はほっと息をついてから、小首を傾げて俺の顔を覗き込み、告白した。

「ん、とね、笹岡くん。今日は突然来ちゃって、ほんとにごめんね？　怒ってない？」

「いや」

むしろ嬉しかった、といえば真雪は喜ぶだろうか？　が、それを言う機をはずされてしまった。

「ほんと言うとね、今日は、笹岡くんと一緒にいたいなって思ってたの。だけど、クリスマスイブだからってことで笹岡くんに気を遣わせちゃ悪いかなって……。笹岡くんバイトで忙しいの知ってたし」

「……」

「だからわたしもバイト入れちゃえば、お互い予定があるんだってことで、無理に会わなくてもよくなるかなって……」
そんな風に遠慮していたとは思いも寄らなかった。悪気なく誘いを断わられたのとばかり思っていた。
真雪は、寒いからなのか、それとも気恥ずかしさからか、少々早口になっていた。瞬きの多い瞳は、俺をまっすぐにとらえている。
「でもね、それをりこちゃんに言ったら、怒られちゃったの。『しようもない遠慮してるんじゃない！』って」
りこちゃん、というのは、真雪の友人の岡崎さんのことだ。岡崎さんは、さりげなく俺の背を押し、なおかつ真雪の後押しもしてくれる。
その岡崎さんが、どんな顔をして真雪を叱ったのか、大体は想像がつく。おそらく呆れた顔をしていたに違いない。
「『笹岡くんはまゆにとって初カレでしょ？　その初カレとクリスマスイブを一緒に過ごさないでどーするの！』って、ものすごい剣幕で叱られちゃったの。せっかく買ったプレゼント、イブに渡さないでいつ渡すのって、それもつっこまれちゃった」
真雪は肩をすくめて、苦笑してみせた。笑窪が真雪の表情を、さらに幼く見せる。
「ということで、笹岡くん」
はい、これ、と言って、真雪は持っていた紙袋を俺に差し出した。
どうやら「せっかく買ったプレゼント」であるらしい。俺はもちろん、ためらうことなく受け取った。それから中身を確かめていいかを尋ね、了承を得てから、紙袋の中身を取り出した。紙袋の中には二つの包みがあった。一つは紙袋と同じ紙で包装されていた。それの中身はマフラーだった。チャコールグレイがベースになっているチェック柄のマフラーだ。
真雪は、
「どういうのがいいのか分からなくて無難なものになっちゃったけど……色とか、嫌いじゃない？」

と言って、不安げに俺の様子を窺ってくる。
たしかに、無難な色と柄ではあるが、そうしたものの方がどういった格好にでもたいてい合うから、俺としては助かる。
好きな色だと応えると、真雪はほっと胸を撫で下ろした。真雪の素直すぎる反応が可愛くて、つい口元がにやけてしまう。
「こっちの小さいのは？」
「あ、そっちはね……」
紙袋の中に入っていた、もう一つの包みの中身は、焼き菓子だった。これは真雪の手作りらしかった。
「ジンジャーマンクッキーなの。ほら、クリスマスといえば、ジンジャーマンかなって。ちょっとかたくなっちゃったけど、味はそんなに悪くない、はず」
「いいにおいだな」
今すぐ食べてみたかったが、それよりも前に、するべきことがある。
「真雪」
俺はおもむろに、肩から斜めにかけていたバックから、真雪に渡そうと思っていたそれを取り出した。それ、とはつまりクリスマスプレゼントだ。今夜真雪と会う約束はしていなかったのだが、未練がましくバックに入れておいて正解だった。
「俺からも、これ」
「わたしに？　いいの？」
真雪は驚き顔を俺に向け、差し出されたそれを受け取りあぐねていた。
「いいも何も、貰ってもらわないと、俺が困る」
「え、困るって言われるとわたしも困っちゃうんだけど……。えぇっと、それじゃ……」
遠慮なくいただきます、と言って、真雪はようやくプレゼントを受け取ってくれた。
チョコレート色の包装紙に包まれたそれの中身は、ローズピンク

のパシュミナだ。真雪は素直すぎるほどに大喜びし、「ありがとう、嬉しい」と言って笑顔を見せてくれた。
――そうだ。俺も『しようもない遠慮』をする必要はないんだ。
「それから、俺ももう一つ」
「え？」
もう一つのプレゼントを、真雪に差し出した。フェルト製の小さなバックは、サンタとトナカイのアップリケが施されている。
「中に何か入ってる？」
真雪はフェルトのバックに入っている白い箱を取り出した。首をかしげ、その中身を取り出す。そして、「わぁ」と声をあげた。
「スノーボールだ。可愛い！」
スノーボールとかスノードームとかいうらしいそれは、ソフトボールくらいの大きさのガラス玉に台座がついている置物だ。振るとそのガラス玉の中で白い粉雪が降り落ちる。
ガラス玉の中、ひとつのマフラーを一緒に巻いてベンチに座っている男女がいて、その横には赤いとんがり帽子をかぶった雪だるまがいる。
真雪は早速スノーボールを軽く振って、雪を散らさせた。
ガラス玉の中は、ホワイトクリスマスだ。
「こういうの大好き！　ありがとね、笹岡くん！」
真雪は満面の笑顔で礼を言ってから、ふと何かを思いついたように、俺の腕をきゅっと掴んだ。
「さ、笹岡くん」
「ん？」
真雪は半歩進んで、俺の前に立った。真雪は小首を傾げるようにして俺の顔を覗き込んでくる。笑窪があどけない。
「笹岡くん、今日バイトでかぶってた帽子って、サンタクロースの帽子？」
「ああ、あれね。まぁ、一応そうらしい」
しまった。アレを見られたか。そういえば店内に入ってきたと言

っていたな。
「似合ってたね、笹岡くん。“背の高いサンタクロース”っていう歌のフレーズを思いだしちゃった」
真雪が思いだしたという歌はずいぶんと古い歌だが、この季節になると一度くらいはどこかで耳にする。歌そのものより、タイトルが有名といっていいクリスマスソングだろう。
そのクリスマスの主役とも言えるサンタの格好（帽子だけだが）が似合うと言われてもなぁと、俺は微妙な面持ちになり、ため息をついて天を仰いだ。
そこに見た風景は、地上よりずっと彩りの少ないものだった。
風はさほど強くなく、そのため雲は悠然と夜空に横たわっている。雲間に、ちらちらと光る星が見えた。地上のイルミネーションと比べるとその光はあまりにか弱く、はかない。だが冬の星の瞬きは優しく清澄で、雪の欠片のようだ。
「あ、あのね、笹岡くん、え、と……」
名を呼ばれ、視線を落とすと、そこにはやわらかな星の瞬きを瞳に宿す真雪がいる。ちょっと息を詰まらせたような顔をして、俺を見つめていた。かと思うと真雪は、辺りをきょろきょろと見回し始めた。
にわかに人の往来が少なくなった。誰もいないわけではないが、俺と真雪に注意を向けるものはいなさそうだった。
「笹岡くん……」
屈んでくれと言わんばかりに、真雪は俺の袖口を引っぱった。
真雪は、いつでも突飛だ。そしてこちらが驚くほどに急に大胆になる。
真雪は俺の袖をきゅっと掴んだまま踵をあげ、爪先立った。そして顎をあげ、……――
「メリークリスマス。わたしの……サンタさん」
照れくさそうにそう言ったかと思うと、ちゅっ、と、俺の唇に、真雪のやわらかいそれを触れさせた。

あっけない、けれどやさしく甘い、それは思わず快哉を叫びたくなるような、最高の贈り物だった。

そしてもちろん俺も、すぐに返礼のキスをした。

真雪のように“やさしく”とはいかなかったが。

うたたね姫に眠れぬキスを

世に、不思議なことは多い。
女の子は、そのさしたるものだ。
俺の中で『不思議な女の子』の頂点に立っているのは、中原真雪という名の女の子で、彼女は、不思議の頂点に立っていると同時に、特別席に座ってもいる。
立ったり座ったり、起きたかと思うと、また眠ったり。彼女はいつもめまぐるしい。

何が不思議かというと、
「寝入ってしまうまでの時間の早さ」も、その一つだ。
俺の肩が真雪専属の「安眠枕」になって、どれくらいが経つだろう。百年もこうしているような気がするが、実のところ、まだ一年も経っていない。
が、今不思議なのは、真雪がうたた寝をしていないという現在の状況だった。

暗い場所、硬いシートにじっと座っている。真雪はまっすぐに前を向いている。時折はもぞもぞ動いて姿勢を変えたが、俺の肩にもたれかかろうとはしない。顔を見合わせることはあっても、肩に触れることは一度もなかった。
大晦日、人の入りのさほど多くない寂れた風情の映画館で、俺と真雪は、冒険アクション系の大衆映画を観ている。
真雪は、うたた寝もせず映画に見入っていた。

寒風が、容赦なく吹きつけてくる。空には平べったい雲が幾つかあって、風に流されてはその都度形を変えた。月がないせいだろうか。星が、異様なほど白く瞬いている。
俺は腕時計に目をやり、時間を確かめた。
軽い食事を済ませてから映画館に入ったのは、七時。それからおよそ二時間強。九時半近かった。
「うー、さむぅぅ〜っ」
真雪は赤いダッフルコートの襟元を掴んで身を縮ませ、ベージュ色のマフラーに首を埋めこんだ。
真雪の髪が、吹きつけた北風のせいで、くしゃくしゃになっている。本人は寒さで髪をなおすとごろではないようだ。
「けっこう長い映画だったな」
俺はほとんど無意識に、真雪の頭に手を置いていた。真雪は上目遣いに俺を見る。ほの暗い外灯の下でも、頬と鼻先が赤くなっているのが見て取れる。
「うん。でも面白かった。続編もありそうだよね？」
「そんな感じだったな」
「あったら、また観たいな」
真雪は、映画鑑賞が趣味らしい。月に一度は映画館に足を運んでいる。友達を誘うこともあれば、一人で行くこともあるらしい。
「趣味って言っても、そんな詳しくはないんだよ？」と、本人は何やら照れくさがっている。
大衆向けの娯楽映画が、気楽に観られて好きなのだという。だから、「偉そうに語れない」のだとも、言った。
「それにしても今日行った映画館、気に入っちゃったかも！　空いてるからかもしれないけど、なんだか落ち着くし。ちょっとしょぼいけど、そこがまたいい感じで！」
俺達が通う大学は郊外地にある。その郊外地のさらにはずれに、それなりに大きな映画館を見つけてきたのは、真雪だ。
大晦日の今夜、二人で出かけないと誘ったのは、俺からだ。つい、

三日前のことだ。
その時はまだどこに出かけるかなぞまったく頭になく、とにかく真雪に約束を取り付けることばかりが念頭にあった。……焦っていたのかもしれない。
俺が、「どこか行きたい所はあるか」と訊く前に、真雪は映画を観たいと言った。
観たかった映画らしい。
「つきあってくれる、笹岡くん？」
不安げに、俺の顔を覗き込んできた。
断るはずがないだろう。俺がそう言うと、真雪はほっと安堵のため息をついた。笑窪が、真雪の幼顔をさらに童女のように子供っぽく見せる。
真雪の無邪気な笑顔を受け、俺もため息をついた。

俺もだが、真雪も短期のバイトを入れた冬休み、会えるのは夜だった。
真雪にはほとんど警戒心がない。
俺にとってそれは不本意なことだったが、大晦日の今夜まで、警戒心を抱かせるようなことはしなかった。……できなかったのは、あくまで時間的な余裕がなかったせいであって、心的な理由からではないと、何やら自分に言い訳をしている自分がいるが。
「ね、笹岡くん？」
「ん？」
小柄な真雪は、上背のある俺の顔を見るために、顎をあげる。首元から風が入り込んで寒かったのか、巻いていたマフラーを掴んで首に押し付けている。
「ちょっと、小腹空かない？」
「そうだな……。つっても、今夜は席空いてなさそうだよな、ファ

ミレスも」
「大晦日だもんね」
「ほんのちょっと前までクリスマスのイルミネーションをうんざりするくらい見せられたってのに、早いよな」
「片付けてない家、まだあるよね。さすがに電源は落としてるけど」
「元旦にまた点けるんじゃないのか？　サンタ以外」
真雪は笑って、それにしても、と続けた。
「あっという間に大晦日で、明日は元旦なんて、なんか実感ないよ」
「まったくだ」
映画館を出てから、とくにこれといった目的もなく、……というか田舎町ということもあって、他に遊ぶところもなく、帰る気はまだなかったものの、俺と真雪は最寄の駅に向かって歩いていた。その道中、ふと目についたファミレスやイタ飯屋に目をやりながら、他愛ないことを話していた。
「じゃ、コンビニ寄って、何かあったかいの買おう」
真雪は、俺の計画のなさを責めない。責めないどころか、まったく気にしていないようだ。
俺だけが、もっと綿密に『二人きりの大晦日計画』を立てておくべきだったと悔やみ、不甲斐なさでいっぱいになっていた。

ともあれ、コンビニを見つけるやすぐに飛び込み、温かい食べ物と飲み物を購入した。
売り切れ寸前の肉まんと餡まんをどうにか手中におさめた。
俺と真雪はコンビニの外、金網にもたれてほかほかと湯気のあがっている肉まんをほおばった。
「……真雪」
俺の横で餡まんをはふはふ言いながら食べている真雪に、声をかけた。
「ん？」

何、と、真雪は目を見開いて、俺を見つめる。黒目がちな目が、少し潤んでいる。餡まんが熱かったからかもしれないが、真雪は俺を見るとき、時々そんな風な目をする。冬の星よりももっと、瞬いている。

「真雪は、映画館ではまったくうたた寝しないな？」

ただの一度も、俺にもたれかかってこなかったな、とは言わなかった。

今まで、二度真雪と映画を観にいったことがあるが、その時も真雪は俺の肩にもたれかかってこなかった。そしてうたた寝することなく、映画を観賞し終えた。退屈なシーンなんかは、俺の方がうとうとしかけたくらいだ。むろん真雪は、それを咎めたりはしない。

「え、だって」

真雪は喉を鳴らし、ちょっと苦しそうな顔をして、口内の餡まんを飲み込んだ。

「勿体無いでしょ？」

そう言ってから、真雪は小首を傾げて笑った。

白い息が、俺のいるのとは逆の方向へ流れた。

風が、真雪の髪をまた乱した。真雪は缶コーヒーを持っている方の手で、顔にかかった髪をのけた。真雪のほっそりとした肩に、柔らかい髪がさらりと流れている。

「どんな映画でも芝居でも、劇場で観てる時は、一度も居眠りしたことないよ。ちゃんと見届けたいっていうか、せっかく観に来た以上はきっちり観なくちゃ勿体無いっていうか」

妙なところで律儀な真雪らしい理由だ。

俺は「なるほど」と言って、笑った。

「だからね」

真雪は肩をすぼませた。そのすぼませた肩を、俺の腕に寄せ、ひっつけてきた。

「だからね、笹岡くんと一緒に観る時は、こうやってもたれかかれないの。……我慢してるんだよ？」

「……なるほど」
他に言葉が出ず、同じ言葉を返した。
俺は苦笑と出かかったため息を、甘ったるいコーヒーと一緒に飲み込んだ。

俺は、さっきから言おうと思いながらタイミングを計れず言えなかったそれを、ようやく口にした。
「真雪、今夜は時間、まだいいか？」
唐突だったかもしれない。
真雪はきょとんとした顔をしている。瞬きもせず俺を見つめている。
「せっかくだし、二年参り、行かないか？」
ここからそんなに遠くないところに、それなりに大きく、参拝者も多い神社があることを、付け足して言った。ここからなら、電車一本で行ける、とも。
「うんっ」
真雪は嬉しそうに頷いた。

深夜にもかかわらず乗車率の高い特別運行の電車に揺られ、神社に到着したのは、十一時半。
電車に乗る前に駅周辺で寄り道をしたこともあり、思いの他時間をくってしまった。が、いい頃合だろう。
地元ではそこそこに名が知れた神社は、参拝者もそれなりに多く、少ないが屋台も出ていたし、お汁粉も無料で配られ、賑わっていた。
境内の中央で、焚き火が赤々と燃えている。
日付が変わる瞬間を、火を囲み暖をとりつつ待っている者もいれ

ば、社務所付近で酒をくらって待つ者もいる。ケータイの液晶画面を気にしつつ、仲間とつるんで談笑している者もいるし、社殿前の鈴をやたらとガラガラ鳴らす者もいる。
真雪と俺は、焚き火から少し離れた場所で、紙コップに入ったお汁粉を啜っている。
「なんだかお正月って気がしてきたね」
真雪はほくほくとした顔で、笑う。
松の木の下、踏まれて潰れた松ぼっくりが幾つも転がっていた。
俺と真雪の影が、その松ぼっくりをさらに潰している。オレンジ色の炎がつくる影は黒々と重いが、熱くもある。
俺は一歩、足を踏み出した。足元で、くしゃっと何かが潰れた音がする。また一つ、松ぼっくりを潰したのかもしれない。
「真雪、そこ、座ろう」
ちょうど人が去り、ベンチが空いた。そこに真雪を促し、座らせた。俺も横に座った。
焚き火から離れてしまったせいで、寒風が身にしみる。
「寒いけど、大丈夫か？」
「うん、大丈夫。でも、暗いね。背後の松林がちょっと怖い……かも」
真雪はおどけて笑った。怖がってる様子はないが、案外、本気で怖がっているのかもしれない。
風が吹くと、背後一帯にある松林で梢が擦りあった音をたてる。境内の喧騒を払う、闇からの囁き声のように感じられた。
「真雪、それ」
「え？」
「紙コップ」
「あ、……ありがと」
真雪から紙コップを受け取り、自分のそれと重ねた。そしてベンチの横にあった屑入れに放った。
……いや、したかったのは、それじゃなく、言いたかったのも、

別のことだ。
もどかしさが、俺の眉間に皺を寄せさせる。
それに気づいているのかいないのか、真雪は胸元で両手を組み、やや戸惑ったような、恥じらったような笑顔を見せ、言った。
「あのね、笹岡くん。今日は、ありがと」
「……」
俺は真雪の組まれた両手に、片手を乗せた。小さな手は、すっかり冷えてしまっている。
「今夜、笹岡くんと会えて嬉しかった。映画もつきあってもらっちゃったし」
「居眠りはできなかったけど？」
俺が笑って言うと、真雪も笑って返してきた。
「うん。長い時間笹岡くんと一緒にいて居眠りしなかった初の日だよ、今日は！」
「そういや、そうか」
たしかに、そうだった。
真雪の寝顔を、今夜はまだ一度も見ていない。
そう思うと、不思議な気分だった。少々物足りない気もしないではなかったが、やはり、嬉しかった。真雪の寝顔を見るのもいい。
――だが。
うたた寝姫を、今夜は――――
「真雪」と声をかけたその時に、腹に響くような太鼓の音が社殿から聞こえてきた。
どうやら、日付が変わったらしい。
焚き火を囲む人垣からだけでなく、あちらこちらでケータイの白く光る画面がちらちらとみえ始めた。
俺と真雪は、顔を見合わせた。
第一声は、真雪から。にっこり笑って、「明けましておめでとう」。俺は、「ああ」とだけ返した。
「去年はお世話になりっぱなしだったけど、今年も宜しくね、笹岡

くん」
「俺の、肩にな」
「……」
むっとしたわけでもなさそうだが真雪は黙り込み、俺は失言したらしいことを、悟った。
いや、違う、別に皮肉って言ったんじゃないと言い訳しようとしたのだが、真雪に遮られた。
「……肩も、だけど」
真雪は微笑している。翳がさしている。どことなく所在なげな様子で、寒いのだろうか、体をぎこちなく寄せてきた。
「さ、笹岡くん自身にも宜しくって、言いたくて。えぇっと、でも、笹岡くんの肩ってやっぱり特別で、だからこれからも宜しくっていうのは、笹岡くんの肩にもお願いしたいんだけど、あ、でも、それって笹岡くん自身にちゃんとお願いしなきゃ……なんだよね？」
真雪は早口になって言い、懇願するような目を俺に向けてきた。
俺が「しまった」と思っていたのと似たことを、真雪も思っていたらしい。
真雪の頬は、着ているダッフルコートの色が映っているのか、篝火よりも赤い。暗がりでもそれと分かるほどに。触れてみると、やはり熱かった。
「えぇっと、ですね、笹岡くん。えっと、その……、そういうことで、宜しくお願い……できますか？」
まじろぎもせず俺を見つめる真雪に、俺が今ここですべきこと（したいと思うこと）は、一つしかない。
俺は忍び笑って、言った。
「了解。今年も真雪の安眠に協力しよう。……けど」
「……けど？」
真雪は視線を俺からそらせない。強引な俺の手が、真雪の顎を支えている。
真雪は警戒心を僅かに抱いたようだ。体が、固まっている。

「――今夜は、……」

今夜は、

「……っ」

うたたね姫を眠らせぬよう、激しいキスを。

うたたね姫にいたずらなキスを

ところかまわず、人目もはばからず、いつものごとく俺の肩にもたれかかって、すやすや心地良さげに寝こけている、彼女――中原真雪。

もはや「当たり前」となってしまったこの光景。

おかげで、「相変わらずお熱いねぇ」とからかわれることも、減った。

悪友の瀬川からは、不名誉この上ない、「バカップル」の称号を与えられた。そしてそれは周知の事となり、冷やかされることが減ったのは、瀬川曰く、

「バカップルをからかったって、おもしろくねーじゃん？」

ということらしい。

カップルになったのは認めるが、「バカ」を冠せられるのは不本意だ。

いや、まぁたしかに、客観的に見てみれば、そう言われても否定のしようがない俺達ではあるが……。

真雪という存在が、俺の眉間に皺を刻ませ、無意識的に深いため息をつかせている。

瀬川は皮肉たっぷりに、言う。

「笹岡流の、ノロけってやつだよな？」

俺は押し黙るしかなかった。

午後の授業が急遽休講になり、俺と真雪は構内の図書館へ来ていた。

長椅子の座り心地は、硬くてサイアクだ。しかし動くわけにはいかなかった。

「……」

俺は適当に取った文庫本を読んでいる。真雪はいつものごとく、俺の左肩にもたれかかり、寝入っている。かれこれ、三十分は経ったろうか。
無防備な寝顔、呼吸に合わせ、僅かに上下する力の抜けきった肩。伸びた髪が顔半分を隠していて、穏やかな寝息に時折浮いては落ちる。
安心しきって眠っている彼女は、はたして今、どんな夢を見ているのだろうか……。

瀬川のにやにや顔が、脳裏を過ぎる。
今朝のことだ。瀬川がしごく当然の話題だとばかりに、話をふってきた。
「そういえば、今日はバカップル的には盛り上がる日だよな？　……いや、ちと違うか。男が一喜一憂する日ってのが、正しいか？」
「ああ、そうかもな」
俺のつっけんどんな返事に、瀬川は怪訝そうな顔をする。
「なんだよ、相変わらずクールな反応しやがって。それはあれか。さりげに自慢ですか」
やっかみをこめて、瀬川は憎々しげに俺を睨みつけてくる。
「……ほっとけ」
あえて気にしないよう努めていたが、今日は、クリスマス、正月に次ぐ、冬のイベント日だ。
俺は深々とため息をつく。
――つまり、関心のないふりをしてみたところで、結局のところ、「何か」を期待している俺だった。

今朝会った時から、真雪はずいぶんと眠そうな様子だった。
欠伸をかみ殺すのに失敗した真雪は、照れくさそうに笑う。笑窪が幼顔をさらに幼く見せ、無邪気な感も増させている。
「昨日、ちょっと夜更かししちゃって」
「珍しいな。つっても、眠そうなのはいつものことか」
「いつものことだけど、いつも以上に眠いから、今日もよろしくね」
そう言って、真雪はまた笑う。
俺の肩を「安眠枕」にしている真雪だが、俺の腕を掴む時、まだどこか戸惑いがちだった。いいかな、と不安げな顔をし、そっと手を伸ばす。そして俺の腕を……というより、上着を掴んで、身を寄せる。
今日は冷え込みが厳しい。今朝方霙がちらついて、今も空は分厚い雲に覆われている。
防寒性の高いダウンジャケットを羽織ってきたのだが、失敗だったかもしれない。おずおずと添えられた真雪の手の感触が遠い。
「雪、降りそうだね」
真雪は首を伸ばし、空を仰いだ。
白い息が北風に流され、消える。二十センチ以上低い場所にある真雪の頬は、ほんのりと赤く色づいていた。
俺は、ふいに手を伸ばし、真雪の頬に触れてみた。触れたと同時に、真雪は目を見開き、硬直した。頬はさらに赤くなる。
「冷たいな、赤いのに」
眠っている時の真雪と、眠っていない時の真雪。そのギャップが新鮮でもあり、可笑しくもある。
「……笹岡くんの手は、あったかいね」
真雪は上目遣いに俺を見、はにかんで笑う。
「寒いと、身体縮こまっちゃうよね？　肩、凝らない？」
「少しな」
「……うん、……だよね……。よかった」
「……？」

真雪はほっと小さく息をついた。

真雪は、突飛だ。
意表をついてくる。
存分にうたた寝を堪能できたのか、俺が起すより先に、真雪は目を覚ました。
「あのね、笹岡くん」
寝ぼけた様子もなく、すっきりとした顔をしている。そして長椅子に置かれていた鞄から何やら取り出し、差し出した。
「今日、バレンタインデーだよね」
「あ？　ああ」
「だからね。……えっと、はい、これ。……受け取ってくれる？」
受け取らないはずがないだろう。俺は微苦笑を浮かべ、赤いリボンのかけられた小箱を受け取った。箱には、水色の封筒が添えられていた。
「チョコはあまり甘くないの選んできたの。生チョコ、嫌いじゃないといいけど」
有名メーカーのチョコレートらしかった。洋菓子メーカーに詳しくない俺だが、それでも安価な駄菓子ではないことくらいはわかる。
手作りじゃないのかと、少しばかり落胆した自分が滑稽だった。我ながら呆れるほど、夢見がちなガキだよ、まったく。
「それで、……あのね。そっちの方がメインなの。開けてみて」
「メイン？」
真雪に促され、「メイン」だという封筒の封を切った。
「頑張って、手作りしてみました」
満面の笑顔で、真雪は言う。
封筒の中身は――……
細長い、短冊状の紙。それが二枚入っていた。

「えっとね、そっちが『肩たたき券十枚つづり』で、そっちは『なんでも券十枚つづり』。切り取って使ってね」
――って！　俺は「おじいちゃん」かよ！？
と、即座にツッコミそうになった。
いかにも手作りらしい、『肩たたき券』と『なんでも券』。期限は「無期限」。使用者は俺限定になっていた。ご丁寧にも、一枚ずつ切り離しやすいよう、切込みが入っている。『なんでも券』の方は空欄があり、そこに『何か』を書きこめるようになっていた。
「笹岡くんの肩にいつもお世話になってるでしょ？　だから心ばかりのお礼をと思って、『肩たたき券』。それと、……その……、肩だけじゃなくて、笹岡くん自身にもちゃんとお礼したいから、『なんでも券』は、笹岡くんがわたしにしてほしいって思うこと書いて、使って」
真雪は、「ね？」と小首をかしげ、はにかんで笑う。
「……」
淡いピンク色の紙で作られた『なんでも券』を見つめ、俺はため息をつく。
なんでも、……ね。
苦虫が、口の中で跳ねている。噛んでみると苦味は消え、途端に甘くなる。
「笹岡くん？」
眉間に皺を寄せている俺の顔を、真雪は不安げに覗き込んでくる。
真雪の心配顔を緩和させるために、俺は微笑を返す。むろん、謝辞も忘れず伝えた。
「じゃ、さっそく使わせてもらおうかな、これ」
早速ペンを取り出し、『なんでも券』の空欄にソレを書き記して、切り離す。
四人は座れるベンチ型の長椅子、今、使っているのは俺と真雪だけ。
切り離した『なんでも券』を真雪に渡してから、俺はおもむろに

身体を倒した。
「――……さっ、笹岡くんっ？！」
俺は仰向けに横たわった。狭い上に硬い長椅子は、寝心地がいいとは言えない。だが後頭部にあたる感触は柔らかい。
真雪は完熟トマトのごとく、真っ赤だ。『なんでも券』に書かれた要望に、そしてその要望を実行した俺に、真雪は驚き、慌てふためいている。予想通りの反応に、つい、口元がほころぶ。
真雪は受け取った『なんでも券』を握ったまま、中途半端な万歳の格好で硬直している。
「たまにはこういうのもいいな」
俺が余裕ぶって笑うと、真雪はさらに頬を火照らせる。
多くはないが、それなりに人目はある。好奇とやっかみ、呆れたような視線が注がれる。
だが目を閉じてしまえば、人目など気にならない。
真雪も、そうなのだろうか。
「さ、笹岡くん、……その、えっと」
うろたえっぱなしの真雪の声に、俺は瞼を上げた。
「真雪の膝枕、気持ちいいな」
「……う、と……、そ、そう？」
真雪はどうやら観念したらしい。大きく息をついてからようやく手を下ろし、ためらいがちに左手を俺の頭に添えた。そして、おそらくは無意識にだろう。指先で髪を撫ぜる。
「でもね、笹岡くんの肩の方がずっと気持ちいいと思うな」
「て言われても、俺は俺の肩にはもたれかかれないしな」
「……うん」
俺は再び瞼を閉じた。
こんなところを瀬川に見られたら、「この天然バカップル！」と冷やかされることだろう。あるいは呆れ果てられ、ツッコミも入らないかもしれない。
小さな手が、ぎこちなく俺の髪を撫ぜている。真雪のぬくもりが、

ゆっくりと身体に沁みてくる。
額や頬をくすぐるのは、真雪の髪だ。揺れる毛先が、こそばゆい。
目を閉じていても、真雪の落ち着かなげな顔が見えるようだ。眠っちゃったのかなと、俺の顔を見つめているのだろう。気配が、近い。
「……」
俺は薄目を開け、真雪の髪を掴んだ。
「あ、ごめん。髪、くすぐったかった？」
「……俺、真雪にちゃんと言ってたっけ？」
「え？」
「好きだって」
「……え、と」
「改めて言うと、気恥ずかしいもんだな」
「……改めて言われる方も、恥ずかしい……デス。けど、あの……」
真雪はじっと俺を見つめ返す。瞳はわずかに潤んでいた。
「わたしも笹岡くんのこと、好きです」
「……」
ふっと、笑いが出る。肩の力が抜ける。
たしかに、改めて言われるのも、気恥ずかしいな。
照れくさくなった。
だから、それを隠すために、真雪の髪を引っ張った。そして、もう片方の手を真雪の熱い頬に添えた。
「……さっ、笹岡く……っ」
軽く、口先に触れる程度のキス。
そうして俺はまた目を瞑った。

真雪の膝枕は、「安眠枕」としての機能は低い。心地はいいのだが、安らかには眠れそうもない。
まだまだ「バカップル」としての修練が足りないようだ。
真雪はというと、もう勘弁してください～と、情けない声をあげ

る。
「うう……っ、笹岡くん、落ち着きません～っ」
「……そのうち慣れる」
「な、慣れないよ～っ」
「慣れる。……俺が慣れたみたいにな」
「ううっ」
慣れた頃には、完全無欠の「バカップル」だ。瀬川なら、そう言うだろう。
俺は苦笑をもらすつつ、頭の片隅で、残りの『なんでも券』の使い道を考えていた。

うたたね姫にお返しのキスを

義理とか友とか逆とかいう単語を冠せられ、やれピンクだの赤だの、レースだのリボンだのと、「可愛く」て「乙女っぽく」を派手な装飾で主張させ、買い手のココロを微妙な具合にくすぐってくる、もはやチョコレートの日と言って差し支えないだろうそのイベント日から、一ヵ月後。

その日、純白とは程遠い色をした腹の持ち主が、返礼にやって来た。

「お、ここにいたのか。探したぜぇ」

浮かれた足取りで俺と真雪の前に現れたのは、悪友の瀬川だ。寝癖くらい直せといいたくなる髪型だが、ワックスで整えてあるのだから、直しようがない。

いかにも軽薄そうな外見の瀬川は、自らを、義理堅く、人情に厚く、誠実な好男子だと語る。軽薄じゃなく、「爽やか、且つフレンドリー」と言ってほしいらしい。

ヤツのたわごとはさておき、その自称・好男子の瀬川は、ヤツには不似合いなパステルピンクの紙袋を携えてやって来た。

そろそろ暮色がたれこめてきそうな、花曇りの午後三時半のことだ。

「中原さん、これ、受け取ってよ」

瀬川は薄気味悪いほど愛想良く笑って、俺と真雪のはす向かいに腰かけた。そして、パステルピンクの紙袋を、真雪に差し出した。

長年の付き合いでうんざりするくらいに、瀬川のこういう薄っ気味悪い笑顔の裏にはとんでもないたくらみが隠されていると、知っている。

だが、真雪はそれを知るよしもない。知らなくてもいいことだが、

少しくらいは警告を与えておくべきだったか。
俺の「うたたね姫」は、俺にもたれかかり眠ろうとしていたのだが、瀬川に声をかけられ、慌てて体勢を直した。今さらという気もするが、ちょっとだけ気恥ずかしげな様子だった。
「やー、わりぃね。うたた寝タイムをお邪魔しちゃって」
「ううん」
真雪はふるふると小さく首を振った。
その横で、俺はむっつりと押し黙り、瀬川を睨みつけている。
瀬川が今日来ることは、事前に連絡を貰っていた。
別に、今日じゃなくてもいいだろう。代わりに俺が渡しておくと言ったのだが、瀬川は「だめだめ。ちゃんと手渡したいんで」と、含み笑って、断わりやがった。
俺は「さっさと用件済ませて帰れ」と、無言の圧力をかける。
瀬川はニヤニヤ笑って、まるで意に介さない。

三月、半ば。
とうに春休み期間に入っていたのだが、バイトの休み日なんかは、時々こうして大学に足を運ぶ。
図書館を利用することもあるし、先輩に呼び出しをかけられ、ゼミ室で雑用を片付けさせられることもある。単に食事や茶を飲みに来る、ということもある。
キャンパスに学生食堂は二つあり、一つはカフェテリア風の広い食堂で、一つは古臭い大衆食堂といった風情のこぢんまりとした食堂だ。
カフェテリアの方で、俺と真雪は待ち合わせ、そしてまったりと茶を飲んでいる。春休み期間ということで、厨房はとうに閉まり、場所だけが開放されている。学生だけでなく教授や講師も利用していて、まばらにだが、それなりに賑わっていた。
俺と真雪は、出入り口からも人目からも離れた場所を陣取った。

静かな場所の方が、転寝するには好都合だろう。つい、真雪がうたた寝をすることを前提に行動をとってしまう自分が、滑稽でもある。
瀬川なんぞは、「地味で金のかからねぇデートだなぁ」と、呆れつつ、からかってくる。
……言っておくが、他の場所にも出かけている。
大抵は俺から真雪を誘って出かける。一応「デート」らしいことはしている、つもりだ。
それを、いちいち瀬川に報告なぞするか。

今日も、俺から真雪を誘った。
昨夜電話をしたところ、
「明日は午前中だけでバイト終わるから、昼過ぎに図書館に本を返しにいこうと思ってたの」
ということらしく、それならば大学で会おう、と、約束を取り付けた。
春休みの期間中、自動車の運転免許をとりに教習所通いをしている俺だが、今日だけはバイトも教習所も休みだ。
三倍……とまではいかないが、とりあえず無難な菓子と小物を用意した。
さらりと渡してしまえばよかったんだが、タイミングを逃してしまった。そのうえ瀬川に先を越されるとは。がっくり度はうなぎのぼりだ。
「たいしたもんじゃないけど、それ、バレンタインのお返しね」
瀬川は、俺が言おうとしてたさり気ない台詞まで、あっさりと口にした。
俺は腕を組み、不機嫌顔で瀬川を睨み続けている。
俺の横に座っている真雪は、俺の渋面に気づいていない。にこっと笑って、素直に瀬川の「お返し」に礼を言った。
「そのために今日わざわざ来てくれたの？　ありがとう、瀬川くん」

真雪は、名前に似合ったその純真さを、瀬川にも向ける。屈託なく笑っている。
律儀な真雪は、瀬川にまでチョコをやっていた。むろん、「義理」だ。
俺の友人ということで、気を遣ったのだろう。他愛ない贈り物で、お歳暮や年賀状程度の、いわば時節の挨拶のようなものだ。
で、今日、三月十四日の「ホワイト・デー」。自称だが義理堅い男の瀬川は、義理チョコのお返しを持ってきたというわけだ。
「開けてもいい？」
真雪はまずちらりと俺の顔を窺ってから、瀬川に尋ねた。俺は無言だったが、瀬川は「うん、開けて開けて」と、せかすように言った。
真雪は、紙袋が破けないよう丁寧にシールをはがし、中身を確かめた。
「まずは飴ちゃんね。適当に詰めといた。あ、ゲーセンで取ったヤツとかじゃねーから」
訊きもしないのに、瀬川はご丁寧にも中に入っているものを、俺に話して聞かせる。
「……ん、と？　これは？」
真雪は紙袋の中から、味も素っ気もない茶封筒を取りだした。
「お、それそれ。それ、メインだから」
「……」
どこかで聞いたような科白だが。
俺と真雪は顔を見合わせた。
真雪はちょっととまどったようだが、そろりと封を開け、中身を取り出した。
「あ！」と、真雪は思わず声をあげた。
数枚の写真がテーブルに並べられた。
「気に入ってもらえた、中原さん？」
俺と真雪とを見やって、瀬川は満足げな笑顔を浮かべた。

真雪は素直に喜びの声を上げた。ことに、「可愛い」という単語を連発して。

――勘弁してくれ。

テーブルに並べられた幾枚かの写真。それら全てに、「俺」が写っている。つまり、「俺」の写真だ。

俺は片手で頭を支えた。こめかみに青筋が浮いている気がする。眉間の皺は、さらに深みをまして刻まれていることだろう。

「わぁぁっ、笹岡くんの学生服姿、すごい、新鮮だよ～」

「だろ？　ほかに邪魔なモブも入ってるけど、それは大目に見てよね」

「わ、これ、修学旅行の？　こっちは？　野外学習っぽいね？」

「うん、それ、キャンプの。中学の時んだよ。やー、懐かしいねぇ」

「中学の頃の笹岡くんって、まだそんなに背、高くなかったんだ？」

「あ～、けど、急にアホみたく伸びやがってさぁ。高校入った頃には今くらいになってたかな。なぁ？」

「……ああ」

俺は無愛想に相槌を打った。

真雪は大興奮で、一枚一枚（合計八枚もあった）の解説を瀬川に頼み、聞いては、感嘆のため息をついている。とにかく、真雪は嬉しそうだ。大喜びしている。

……俺はというとは、ひじょうに……微妙な気分だ。

「アルバム整理をしていたら懐かしの写真がけっこう出てきてさー」と、瀬川は言うが、「整理をしていて」出てきたとは到底思えない。わざわざ掘り出してきたにちがいない。

真雪のためだと思えば、まぁ、その労力をねぎらってやっても良いが……、どうにも腑に落ちない。

真雪は、学生服姿の俺と瀬川が写っている高校の卒業式の写真を見せつつ、訊いてきた。

「瀬川くんとは中学も高校も一緒だったんだ？　長いんだね、付き合い」
「うんざりするくらいにな」
俺はげんなりとした顔と声で応えた。瀬川は、「まさしく腐れ縁」と笑っている。
「んでだ。中原さん」
瀬川は、やにわに言った。
「？」
真雪は首を傾げた。目をぱちくりと瞬かせて瀬川の浮かれきった顔を見る。
「さらに！　秘蔵の写真が、今、ここに！」
瀬川はシャツの胸ポケットにしまっておいたそれを、いささか芝居じみた風にサッと取り出した。
「なんと！　安眠肩枕男・笹岡暁の生肩写真だ〜っ！！」
安眠肩枕男ってなんだよ、というツッコミを入れる間もなく、真雪はその写真を受け取った。
「わっ」、とは、真雪の声。ちょっと恥ずかしげで、だが、目は写真に釘付けになっている。
「おいっ」、と慌てたのは、俺の方だ。
生肩写真っていうのはつまり、……
上半身だけだが、素裸の俺の写真だった。
「見返り美人ならぬ、見返り安眠肩枕男ってことで」
いやだから、安眠肩枕男ってなんだよ！　いやそれより、この写真はなんだ！？
「おととし、海行ったじゃん？　そん時の写真。ま、ちょっと加工はしたけどね。中原さん用に、フォトフレーム風な枠も入れといたから」
写真に見覚えはなかったが、海に行った記憶もあるし、写真も撮られていたような記憶もある。
「真正面からより後ろからの方が、肩が強調されてるし、中原さん

的には嬉しいんじゃないかな、と。どう？　なかなかいい写真っしょ？」
「うんっ」
真雪は笑窪を見せる。頬が少しばかり赤い。
「ありがと、瀬川くん」
「おうっ」
瀬川は親指をびしっとたてて、破顔一笑した。
俺だけが、喜怒哀楽のうち、どの表情を浮かべてよいのやら困り、複雑な面持ちで沈黙していた。

その後すぐ、瀬川は、「これ以上邪魔すると笹岡と馬に蹴られちゃうんで～」と、満足しきって立ち去った。
真雪は頬を緩ませて、写真に見入っている。
「いいものもらっちゃった」
と、とにかく喜んで、にこにこ笑っている。
俺は口の中の苦虫を噛み潰せず、ため息をつき、
「真雪、飴一つもらうぞ？」と、紙袋の中の飴をひとつ、取った。
何味かも確かめずに口の中に放ったのだが、レモン味だったせいで口元の苦味が酸味にかわり、表情をやわらげるのは失敗した。
真雪は俺の酸っぱげな表情などおかまいなしに、ほくほく楽しげに笑って、言う。
「この写真、安眠のお守りにするね？　笹岡くんの肩にもたれてる気分になって毎晩眠れるなんて、嬉しいな」
「……あのな」
「枕元に置いておこっと。これ、永久保存版にするね？　そうだ、破れないように何かに挟んでおかなくちゃ……」
「……」
俺の口からはレモン味のため息がこぼれ出る。
瀬川め、覚えてろ。

「それにしても笹岡くんの肩って、やっぱりいいな。引き締まって、逞しくて、頼れそうで。わぁ……どうしよっ」
真雪は片手を赤くなっている頬にあて、わずかに身を縮こまらせた。急に照れくさくなったらしい。「どうしよっ」の意味は分からないが、俺は、「どうしてやろうか」、それを真雪に教えたくなった。
「真雪」
「え？」
真雪の肩を抱き、強引に寄せた。真雪の丸い顎を指先に乗せて、顔を上げさせた。
真雪は肩をすくめる。ちょっと待ってと、目が慌てている。が、無視した。
「……っ」
レモンの甘酸っぱさが、真雪の唇に触れ、すぐに、口の中いっぱいに広がった。真雪は酸っぱさと恥ずかしさのあまり、硬直している。
真雪の頬に小さな飴玉が転がり入り、甘酸っぱさを全身に伝わらせている。
飴玉がとけるより早く、真雪の方が先に蕩けそうになっていた。
「バレンタインのお返しな」
「さっ、笹岡く……っ」
もちろん後で、ちゃんとしたお返しは渡すが。
とりあえずは、ちょっとした「仕返し」を、うたたね姫に。
俺が傍にいて、安眠できるとは限らないことも、真雪は知っている。

うたたね姫に満つ色のキスを

女の子というのは、タイヘンだ。
勉学に励むより大切なことがたくさんある。
たとえばそれはファッションだったりメイクアップ術だったり。
まぁ、その二つは一括りにしていいものなのだろう。そこにダイエットという項目が入ることもあるようだ。
そのためにはネットで口コミを調べてみたり雑誌やテレビで得た情報を試してみたり、バーゲンセールに突撃して小遣いをつぎ込んでみたり、とにかくあれやそれやと試行錯誤して、日夜頑張っている。
もちろん、それほど気負わず、素のままでいる女の子も多い。流行りものを追いかけず、また意固地になって逆らうこともない。あるがまま、自然体でいる。
俺の周りにいる女の子でいうなら、中原真雪という女の子がそうだ。流されやすそうに見えて、存外そうではない。が、頑なさはなく、しなやかに撓(たわ)む梢のように、気ままに向きを変える風を受け流している。
ふわふわと柔軟に、日々を過ごしている。
彼女なりの処世術なのかもしれない。

そんな風に、ふわふわとして暢気な彼女を、半ば強引につついて、せっつく友人がいる。
「ねぇ、ちょっとマユ。もういいかげん、メイクくらいしたらどうなの？」
真雪の友人、岡崎さんだ。風のごとく、真雪の心を揺さぶる。
いつものごとく、うたた寝をしようと俺の横に腰かけた真雪だったが、いささか驚き、目をぱちくりとさせている。

「りこちゃん？　え、何？」
「マユさぁ、高校ん時からそうだったけど、顔、ちっともかまわないよね？　リップも薬用とＵＶのしか持ってないでしょ？」
「う、うん……」
「あたしの買い物に付き合ってコスメ用品いろいろ見てるくせに、自分は揃えようとしないし！」
「だって……」
会話、というにはあまりにも一方的な、真雪と岡崎さんの会話だ。岡崎さんはたたみかけていくような口調で真雪を追いこんでいく。
「あげた試供品も使ってないでしょ？」
「化粧水とか洗顔料かと、そういうのは使ってるよ？」
「ファンデとかパウダーは？　あと、チークとかもあげたよね？」
「だって使い方、よく分かんないし」
真雪はどんどん小さく萎んでいく。
俺には割って入っていけない類の会話ということもあり、沈黙を決め込んでいる。
俺の横に座る真雪は、困り果て、援けてとばかりに救いを求める目を向けてきたが、すぐに諦め、俺から視線をはずした。諦めたというよりは、巻き込んではいけないと思ったのかもしれない。真雪は暢気者だが、空気を読める程度の器量はある。
俺は、「ごめん」と言う代わりに小さく肩を竦め、ため息をついて苦笑いをごまかした。

キャンパス内の、それなりに人の往来の多いカフェテリアの一角に、俺と真雪と岡崎さんはいる。
授業後、別段待ち合わせていたわけではないが、真雪がまず俺を見つけて、「ねぇ笹岡くん、時間いい？　ちょっとお茶していこうよ」と誘い、そこに彼氏と会うまでの時間つぶしをしたかったらしい岡崎さんが加わった。

お茶を飲みつつ雑談し、そうしているうちに真雪がちょっと眠たげな顔をして小さな欠伸をした。真雪は俺に凭れかかろうと椅子ごと体を寄せてきた、その時だった。岡崎さんが真雪のうたた寝を阻むかのよう、唐突に言いだしたのは。

俺は席を立つこともできず、居心地の悪さを堪えたまま坐し、今日のラストの講義で使った英文のテキストを鞄から取り出した。それを読むふりをしながら、真雪と岡崎さんの様子をさりげなく窺う。

真雪は圧され気味だ。視線を泳がせながら、歯切れの悪い口調で応えていた。

「だってわたし、そういうのって、よく分からないから……」

真雪は「どうしてそんなこと急に言うの？」と、困ったような、恨めしそうな目を岡崎さんに向ける。

岡崎さんはさらに怒ったような顔をし、「もうっ」と息をついた。

「分からないんなら雑誌読むなりしてベンキョーすればいいでしょ？　メイクったって、ゴテゴテ塗れってんじゃないんだから！　マユだって美容院行って髪整えるでしょ？　それとおんなじなの」

「えぇ～……？」

真雪は不服そうな声をもらし、岡崎さんは「えぇ～っ、じゃないのっ」と厳しくつっこむ。

真雪は、そっちの方面に関してあまり関心を持っていないようだ。無関心というほどでもなさそうだが、躍起になって研究・実践をしまくることはなく、かといって流行りものに敏感な友人……この場合、身近なところで岡崎さんがそうなのだが……を、冷めた目で見ることもない。

中原真雪は、良くも悪くもマイペースだ。

マイペースすぎる彼女に対し、岡崎さんはやきもきしている。普段は、真雪のマイペースさをからかいのネタにして笑っている岡崎さんだが、時々ふっともどかしくなることがあるようだ。放っておけないとでも思うのか、無用のお節介だと分かっていても小言を言わずにはいられなくなるらしい。

岡崎さんの性分からくるものかもしれないが、真雪には、放っておけないと思わせる、妙な懐っこさがある。
「わたし、りこちゃんみたいにキレイじゃないし、お化粧なんかしたって似合わないよ」
真雪はちょっと肩を竦めて、向かい側に座っている岡崎さんに言った。
「あのねぇ、マユ」
岡崎さんは大きくため息をつく。切れ長で鋭い目で、幼顔の友人をじろりと睨む。
岡崎さんは細面で、キレイ系の顔立ちだ。メイクもばっちり施してあるが、ナチュラルメイクというのだろうか、化粧が濃すぎるという感はない。服装も真雪とは違って流行りものをとりいれたものが多い……気がする。夏場などは、ショートパンツをはいて美脚を惜しげなく披露してくれたものだ。まぁそうした格好は、晩秋の今でも時折見ることはできるのだが。
その岡崎さんと行動を共にすることが多い真雪は、憧憬の眼差しを友人に向け、「りこちゃんってスタイル良くて、かっこいい」と感嘆していた。
真雪は、人を褒めることに関して、ほとんど照れを感じない。いいなと感じたものは、そのまま素直に「いいな」と思い、それを口にする。あるがままを素直に受け入れられるのは、真雪の美点と言えるだろう。
そんな真雪に対して、結局岡崎さんは強く出られない。
「天然のパワーって侮れない。って、そう思わない？」
と、そう言って、岡崎さんは俺に同意を求めてきたことがある。俺は全くだと頷き、心から賛同したものだ。
岡崎さんはさっきまでの強い口調をやわらげ、優しく宥め、諭すような口調になって話を続けた。
「あのね、マユ。何も別人みたくなれっていうんじゃないの。メイクにも人それぞれ似合うやり方があるんだし、それにスキンケア感

覚ですればいいんだから」
「……でも」
「無理強いするつもりはないけど、自分を磨いてキレイにするのって、けっこう楽しいものよ？」
「……」
真雪は珍しく気後れしているようだ。小さく華奢な身体をさらに縮こまらせ、気弱げに口ごもっている。
真雪は小柄で童顔だ。ぱっと見、岡崎さんと同年とは思えない。中学生に間違われることもしばしばあるらしい。
それに関して、真雪は目に見えて落ち込むことはないが、もしかしたら幼く見える外見に少しだけコンプレックスを感じているのかもしれない。
そういえば以前、俺が真雪に、身長百五十ちょいくらいかと聞いた時、「四捨五入すれば百六十あるよっ」とムキになって言い返してきたことがあったな。
俺は少し首を動かして、しょぼんと小さくなってる真雪を横目で見やった。
俺の僅かな挙動に気付いたのか、岡崎さんはすかさず言い募った。
「それに！　笹岡くんの目に可愛く映って、そう思ってもらいたいでしょ？」
岡崎さんはにっこりと笑う。
「え？」
「は？」
俺と真雪の間の抜けたような頓狂な声が重なった。
それからすぐに、真雪ははっとしたように俺を見、俺と目が合うや、紅葉しているモミジの朱色より鮮やかに、ほわっと温かな色で頬を染めた。何か言いたげに口元が小さく動いたが、声にはならなかった。ただはにかみながらも、じっと俺を見つめている。
俺も俺で、なんと返してよいものやら分からず、無言のまま、真雪の眼差しを受け止めていた。

岡崎さんはそんな真雪と俺を見やり、したりと笑って、さらに説いた。
「天然メイクもいいけど、そこにもう一塗り色を添えるのも悪くないって、そう思わない？　ね、マユ？」
「う、うん、そうかな？　そう、かも」
どうやら真雪は、まんまと岡崎さんの術中にはまったようだった。
強引に押されているようで、自然な流れだったのかもしれない。
真雪は両手で頬を挟み、恥ずかしげな様子で何かを期待しているような目を俺から逸らした。

その翌日。
真雪の様相に、わずかな変化がもたらされた。岡崎さんに押し切られた真雪だが、いきなり大変身するほどには説得されつくされてはいなかったようだ。変化はわずかだが、しかしそれでも真雪にとっては大きな一歩を踏み出したといった感があるらしい。
「な、なんだかハチミツ塗ってるみたい……」
俯いたり、俺の顔色を窺ってみたりと、真雪はそわそわと落ち着かない。うたた寝するどころではないといった風情だ。俺の横に座りながら体を預けてうたた寝をしないのは珍しい。
キャンパス内の図書館の片隅、西日の眩しい窓際の狭い席で、いつものごとく、俺と真雪は長椅子に並んで座っていた。閉館時間まではまだ余裕があるが、人は少なく、館内はシンとしている。
俺と真雪は、少しだけ声をひそめて言葉を交わしていた。ひそめられた声が発せられる真雪の口元が、いつもと違うのに気付いたのは、今日、会ってすぐのことだ。
真雪の容貌が僅かに変化していた。唇に、色がある。
ベージュに近いピンク色の紅が、真雪の唇を彩っている。それは、

真雪が言うように、蜂蜜のような艶があり、ぷっくりとした感がある。
……なんというか、実に、……甘そうだ。
当の真雪は、俺の視線も気にならないほど、意識を唇に集中させていた。
真雪は小さな丸型の手鏡を取り出して、そこに映る自分の顔を気難しげな顔をして見つめている。
白雪姫の継母が、「この世で最も美しい女は誰か」と問いかけるような険しさは微塵もなく、鏡もまた、真雪の声には出さない問いに答えない。真雪が、鏡に向かって問いかけているのはおそらく美醜についてではないだろう。眉間に寄せられているのは、不安と期待という翳りだ。
「りこちゃんがおすすめしてくれたリップグロスなんだけど、こういうのつけるの初めてで……。ヘンじゃないかな？」
真雪はようやくこちらに顔を向け、不安な気持ちを素直に吐露した。
上目遣いに俺を見、「どうかな？」と小首を傾げる。計算された所作でないあたり、真雪はまったく天然だ。岡崎さんが言うように、天然のパワーには敵わない。
「ヘンじゃないよ」
「ほんと？　ほんとにヘンじゃない？」
「ほんとにヘンじゃないって。似合ってると思う」
俺が言い重ねると、真雪はほっと胸をなでおろして、表情を緩ませた。
「よかったぁ。笹岡くんにそう言ってもらえて、恥ずかしいけど、嬉しいな」
「買った甲斐があった？」
「うん、あったよ！」
真雪は素直すぎるほどに喜色を浮かべる。
真雪のその反応に、かえって俺の方かせ照れくさくなり、それを

ごまかすために平淡な口調で「よかったな」と返した。
「りこちゃんの言うとおり、ちょっとしたことなんだけど、こういうのってわくわくするかも。だけどやっぱり、本格的にメイクするのは大変そうだって思った。りこちゃんにいろいろ教えてもらったんだけど、すっごい手間がかかりそうで。女の子ってタイヘンだって思った」
「当の女の子がそれを言っちゃぁなぁ」
俺が笑うと、真雪もころころと朗らかに笑う。
「でもね。タイヘンそうだけど、頑張れるところは頑張ってみようかなぁって思ったんだ。ある程度は必要なことなことだって分かったから」
真雪は前向きだ。頑なにならず、臆さず、自分なりの方法で前へと進んでいこうとする真雪の姿勢には感心させられる。そういう屈託のなさが真雪の魅力の一つなのだろう。
俺は少しだけ上半身を傾け、鮮やかで明るい色を肌に乗せている真雪の顔を覗き込んだ。
真雪は大きな目を瞬かせ、微笑みを返してくる。いつもは幼さを感じさせる笑窪も、今日は違った印象を与える。
好き心が湧いてきて、どうにも耐えがたい。
「真雪、買ったっていうリップは、今も持ってるのか？」
「うん。いつでも塗り直せるよう、ちゃんと持ってるよ」
「そうか。……なら、いいな」
「え……？」
真雪は俺に対し、警戒心が薄く、無防備だ。
俺が机に手をつき、身を乗り出した時点で気付いてもよさそうなものだが。
「……っ！？」
真雪はとっさに身を引いたものの、手遅れだ。俺に唇をかすめ取られ、絶句し、そして頬を朱色に染めた。真雪は言動だけでなく、肌の反応もひどく素直だ。

「なかなか新鮮だな、こういうのも」
俺は自分の唇を親指の腹で拭った。蜜のような感触の、それは真雪の唇を彩っていたものだ。
「塗り直しとくといい。俺が、少しとっちゃったからな」
真雪は慌てて口に手をやり、拗ねたような顔をして俺を睨みつけてくる。
「もうっ！　笹岡くんの、……意地悪っ」
含羞に潤んだ瞳で睨まれ、俺は苦笑して肩を竦めた。
真雪のやわらかな声音と豊かな色を持つ表情は、俺の心を甘く満たし、且つ飢えさせる。

うたたね姫に芽ぐみのキスを

日当たりのよい窓際の席にいると、眠気に誘われ、いつしかうつらうつらと舟を漕いでしまう、そんな暖かな初冬の週始め。
「さて、どうする？」
俺の問いかけに、真雪は小首を傾げ、「どうしようか」と笑みを返してきた。

昼休み後の講義が急遽休講になった。こういった情報は驚くほど速く回ってくる。が、今回の情報は直前まで俺の耳に入ってこなかった。そもそも休講自体が珍しい。
真雪はちょっと口惜しげな顔をし、「はぁっ」と大きなため息をついた。
「こういう、突然の休講って嬉しいようなそうでもないような、微妙な感じだね」
「事前に分かってれば空いてる時間を有効利用できるんだが、こうも突然だと実際困るよな」
「うん、ほんとそうだよね」
真雪は嬉しげに笑って言葉を継いだ。
「こうなるともうお昼寝するしかないよ。ということで笹岡くん、今日もよろしくです」
「……」
いやいや、昼寝以外にも時間の潰しようはいくらでもあるだろう。と思うが、それは口にしない。
実に真雪らしい発想で、それが可笑しくもあり、可愛くもある。
「まぁ、とりあえずは茶でも飲もうか。席が空いていたらになるが」
「うん」
真雪はえくぼを見せ、満足げに笑って頷いた。それから遠慮がちに手を伸ばして俺の腕を掴み、さりげなく身を寄せてくる。

緩やかな風が散り落ちていた楓の葉をふわふわと軽やかに舞わせ、俺達はそのあとをたどるように、ゆっくり歩き出した。

小春日和の、まさにうたた寝にはうってつけの午後。

とりあえずは構内のカフェテラスで空いた時間を潰すことにした。カフェはほぼ満席に近かったが運よく席を確保できた。

「昼休みの後でちょうど人がはけて、ラッキーだったな」

「笹岡くんって目敏いよね。やっぱり背が高いと視界が広いんだ」

真雪は感心しきった様子で呟き、羨ましげに俺を見上げてくる。小柄な真雪は人ごみが苦手らしく、人と人の間を抜けて歩くのが下手なんだと語った。

「進もうと思っても、人とぶつかっちゃうとどうしても足が止まって、つんのめっちゃうの。だからね、颯爽と歩ける笹岡くんがすっごくうらやましい」

「体格的なこともあるだろ？　俺は、どちらかといえばぶつかられる方だし」

「笹岡くんは人を押しのけて歩くって風じゃないよ。悠然としてるっていうのかな。スマートできれいな歩き方だもん。たとえばわたしがふらふら歩いてて笹岡くんにぶつかったとしても、受ける衝撃って少ないと思う。風みたいにすっと通り抜けられてく感じで、それでつい振り返ってみちゃうの。笹岡くんのこと、ずっと目で追いかけちゃうよ」

「……」

真雪は、無自覚に俺を照れさせてくれる。褒め殺しの刑に、はたして俺は何度あったことだろうか。

照れを隠すために片手を額に当て、目元を隠す。

どう言葉を返してよいものかと困窮している俺の顔を、真雪は不思議そうに小首を傾げて覗きこんでくる。上目遣いに俺を見つめる

その様子がまた俺を困らせていると、真雪は知る由もない。
「笹岡くん？」
「いや、……そうだな。どうせなら」
俺は苦笑まじりに応えた。
「目で追いかけられるより、一緒に歩いてる方が俺はいいけどな」
真雪は大きく目を見開き、それからぱっと頬を赤くする。素直すぎる真雪の反応がまた俺の笑みを誘った。

ところで今、俺と真雪は、悪友の瀬川と真雪の親友の岡崎さんもともにテーブルを囲んでいる。二人は俺達の姿を見つけ、「相席、いい？」と断られないことを前提に訊き、ちゃっかりと腰を据えた。常に行動を共にしているわけではないが、この四人でかたまることが多い。自然の成り行きというものだろう。……まぁ、気心が知れている分、楽ではある。
俺の隣には真雪、向かいの席に瀬川と岡崎さんが並んで座る。はじめ、真雪は俺の向かいの席に座っていたのだが、岡崎さんが気を利かせ（てくれたらしく）、「真雪は笹岡くんの横」と半ば強引に席を移動させた。
ともあれ、無為に時間を過ごすのは勿体なかろうと、茶を飲みつつ、殊勝にも休講になった授業の予習復習に励むことにした。
しばらくはまじめに取り組んでいた。が、集中力は三十分ほどであっけなく霧散した。最初に脱落したのは、真雪だ。
真雪はあくび一つすると、「肩、いい？」と上目遣いに俺を見、「ああ」と俺の返事を聞くや、すぐさま寝入ったしまった。もともとうたた寝する気満々だったとはいえ、呆れるほどの即寝っぷりだ。俺の肩にもたれ、真雪は安らいだ寝息をたてている。
瀬川も岡崎さんも、真雪の即寝っぷりはいつものことだと、別段気にとめない。俺をからかってもこなくなった。
脱落二番手は瀬川だ。いや、正しくは俺かもしれない。真雪に肩を貸したと同時にペンを置いていた。

瀬川は寝癖と間違われそうな髪型を崩さないよう頭をかき、億劫そうな顔をしてぼやいた。
「古文はさー、なんかこう……もはや暗号だよなぁ」
とはいえ、古代国語研究の授業は必須課目で、この単位を落とすわけにはいかないと、ため息まじりに愚痴ってから瀬川は冷めきったコーヒーを苦い顔で飲み下し、紙コップの中身を空にした。
「ほんとよねー」と岡崎さんも片肘をついて、嘆息した。図書館で借りてきたばかりの参考文献を面倒くさげにぺらぺらとめくるだけめくって、目にとめようとしない。
「漢文もそうだけど、これ読めなくちゃどうしようもないしね。ま、それでも暗号解読は楽しいっちゃ楽しいわね。読み解けた時の快感がたまらないっていうか」
「ああ、それはあるな。意味が分かるとさらにしてやったりな気分になる」
俺が賛同すると、瀬川も岡崎さんも「なるなる！」と頷き合った。

勉強に身を入れる気はすっかり失せ、代わりに雑談が始まった。話題を振ったのは岡崎さんだった。
「しようもないこと思いだしちゃった」と、含み笑いをしながら話しだした。目は、真雪に向けている。思いだしたのは、どうも真雪に関することらしい。
「そのチェリー柄見て思いだしたんだけど」
と言って岡崎さんが指さしたのは、真雪が着ているニットのワンピースだ。オフホワイトの地に大きなさくらんぼが横一列に並んでいる。赤いさくらんぼと緑色の茎と葉、さくらんぼの柄を挟んでいるボーダーラインは黒で、ニットの地色は白。なんとなくクリスマスカラーを思わせる。
「さくらんぼの茎を口の中で結べたら、キスが上手いって言うでしょう？　その真偽はさておき」

「ああ、知ってる知ってる。舌で結べるとってやつだ。それ、たしかできたよな、笹岡？」
瀬川はにやりと笑って俺に話を振ってきた。岡崎さんは、「そうなの？」と何やら目を嬉々と光らせて訊いてくる。岡崎さんの、ばっちり施されたアイメイクによる目力にはついたじろいでしまう。化粧っけのない真雪を見慣れているせいもあるだろう。
俺は眉を僅かにしかめ、「できたな」と短く答えた。
「俺はできなかったんだけどな。あれ難しくね？　なのに笹岡、あっさりできたよなぁ？　マジかよってびっくりしたし」
「あたしもできなかったけど。でね、その話をマユにもしたわけよ。そしたらマユ、キスが上手なのと舌でさくらんぼの茎が結べるのと、どういう関係があるのってまじめな顔して訊き返してきたのよ。あれには笑ったっていうか、ほのぼのさせられたわぁ。高校ん時よ？
ふつう分かりそうなもんだけど」
「うわぁ、めっちゃ中原さんらしいわ。今時珍しいピュアさだな！」
瀬川は大ウケだ。岡崎さんも当時を思い起こして、大笑いこそしないものの、可笑しげに笑っている。が、俺はむっつりと口を噤んでいた。
天然な真雪らしい笑い話ではあるが、どうにも笑えない。俺が笑われているわけではないのだが、どうにも複雑微妙な気分だ。
暢気に寝息をたてていた真雪だが、名を出されたのに反応してか、目を覚ました。何度か瞬きを繰り返し、息をついて、俺の肩から頭を離した。
「……ん、……？」
小さなあくびをし、目をこする。その所作のひとつひとつが幼く、いかにも無垢な少女然としている。たまに中学生に見間違われると真雪はしょんぼりして言うが、さもあらんと思う。
「わたしのこと、呼ばなかった？」
真雪は不思議そうに小首を傾げ、岡崎さんと瀬川を見やった。岡崎さんと瀬川は笑いを堪えて目を見合わせた。

「別に？　呼んでないよ。よく寝てるなぁって見てはいたけどね」
岡崎さんはにこりと笑ってしらばっくれた。つっこもうにも質す言葉がすぐに浮かばず、真雪はちょっと拗ねたような顔をした。その表情がまたひどく幼げだ。
瀬川はというと、場の空気を読んでか読まずか、いかにもわざとらしい咳払いをしてからそそくさと荷をまとめて立ち上がった。
「さて、と！　俺、そろそろ行くわ」
あんま邪魔しても悪いしなと、瀬川はにやにや笑いを俺に向けてくる。とっとと消えろと言わんばかりに睨みつけてやると、瀬川はおどけたように両肩を竦め、小走りになって席を離れた。岡崎さんも瀬川を追うようにして席を外した。
「マユ、気になるんなら笹岡くんに訊きなね？」
去り際、悪戯っぽくそう残して。

「何の話してたの？」
と、真雪が訊いてくるのはもっともなことだ。
俺は苦笑まじりにため息をつき、「とりあえず、出るか」と真雪を促し、そこそこ賑わっていて人目の多いカフェテリアを出た。次の授業までまだ多少時間がある。小春日和の暖かい日とはいえ、屋外で時間をつぶす気にはなれず、足は自然次の授業が行われる館へ向かった。
「ね、笹岡くん？　わたしのこと話してたんじゃないの？」
その途中、真雪は俺の袖を引っ張って、足を止めさせた。ちょうど階段の踊り場に差し掛かり、俺は嘆息して真雪の方に向き直った。
周りに人の気配はない。
「気になる？」
もったいぶって訊くと、真雪はちょっとムキになって「気になるよ」と返してきた。

「……」
焦らしてからかってみるのも一興かもしれないという悪戯心が一瞬頭をもたげてきたが、すぐに思い直した。
焦らしすぎて真雪を怒らせるのは本意ではない。そもそも、真雪が本気で怒ったところを一度たりとも見たことがない。万が一真雪が本気で怒ったとして、どう対処していいやらわからないだろう自分が容易く想像できる。それも思い直した理由の一つだ。
とはいえ、やはり少し曖昧にぼかして答えた。
「さくらんぼの茎を口の中で結べるかって話になったんだよ」
真雪はきょとんとし、小首を傾げた。だがすぐに自分が着ている服の柄がそれだと気付き、「なるほど」と首肯した。天然な真雪だが、その程度には気が回る。その上、「もしかして、笹岡くん、結べたりする？」と訊いてくるくらいの察しの良さだ。
俺はさっきと同じように「できる」と端的に答えた。
そんな俺に対し、真雪はぱっと花が開いたような明るい笑顔を見せた。
「すごいね、笹岡くん！　わたしもチャレンジしたことあるけど、できなかったよ？　練習すればできるようになるかなぁ？」
「……そうだな」
ふと、苦笑が口元に滲む。
まったく、天然の破壊力ははんぱないな。わざとかと疑いたくなる程、真雪の言動は可愛すぎる。
今もまだキスと舌との関連を理解していないのだろうか？
いや、そうは思えない。ほんのりと色づいている真雪の頬がそれを示している。
俺の手はほとんど無意識のうちに真雪の頬に伸びていた。指の腹でえくぼをさすり、そのまま唇へ伸ばした。
弾力のある柔らかい真雪の唇は、赤みは多少薄いが、実に美味そうな色をしている。
「今度やって見せてくれる？」

真雪の口から無邪気な声が発せられる。無防備な笑顔に、俺も笑みを返した。
心をくすぐるような悪戯心はやはりどうにも抑えがたかった。幸い、周りには誰もいない。
「今度じゃなくて、今……――」
「……っ！？」
実践してやるよと、真雪の唇に自分の唇を強く押し当てて……――そして、上手いかどうか、その判断は真雪に委ねることにした。

真雪は、
「わたし、さくらんぼじゃないよ……」
顔中を熟したさくらんぼのように真っ赤に染め、乱れた呼吸を整えた後、恥ずかしげにつぶやいた。

うたたね姫に芽ぐみのキスを（後書き）

芽ぐむ→萌(めぐ)む、とも書きまして、草木が芽生えると同じ意味合いです

うたたね姫にショックなキスを

思うことがあり、俺の左肩にもたれかかって寛いでいる女の子、中原真雪に尋ねてみた。

「真雪の理想の男って、たとえば世紀末の救世主みたいなヤツか？」

いささか唐突だったために、さすがの真雪も一瞬返答に窮したようだ。俺の肩に預けていた頭を離し、目を瞬かせている。

「真雪は筋肉にこだわり……みたいなものがあるだろ？　なんていうのか、ああそう、筋肉フェチっていうのか？」

「うん、まぁ……そうかなぁ」

真雪は小首をかしげ、ちょっと笑った。

否定はしないが、はっきりと肯定もしない。

俺は僅かに眉をひそめ、不思議そうな顔をして俺の様子を窺う真雪を見つめ返した。

真雪はことあるごとに俺の体格や姿勢、歩き方などを褒めてくる。なんのてらいもなく、「かっこいい」だの「きれい」だのと褒めそやし、そうしてから俺の肩にもたれかかってくる。

お世辞でもなんでもなく本気で言っているのがわかるから、どうにもこそばゆくてしようがない。

つきあってみて分かったのだが、真雪はどうやら「均整のとれた体躯」や「鍛えられた筋肉」を見るのが好きらしい。しかも男女問わずだ。

たとえばテレビや映画などを観ている途中、真雪の口をついて出てくる言葉は、

「あの体操選手、腕から肩、それから背中の筋肉のラインがすっごくキレイ！　お尻もキュッてしまってるし！」

とか、

「あの女優さん、階段降りるとき腰から上が全然揺れてなかった。腹筋と背筋をちゃんと鍛えてるって感じ！」
といった風に、ほぼ「筋肉」に関してだ。
これを筋肉フェチと言わずして、何と言う。
だから至極当然に俺は思ったわけだ。
真雪の理想とする男……というよりは筋肉の持ち主は、いったいどんな人物なのかと。
そして思いついたのが、かのアニメ（漫画）の登場人物だった、というわけだ。実際その登場人物と自分が同年齢だったこともあり、ごくごくわずかに、蚤の涙程度に、対抗心があったと言えなくもない。
真雪は小首を傾げた後、「う～ん」とうなった。頭の中でかの人物を思い描いているようだ。
「救世主って、あの拳法の遣い手の救世主のことだよね？　北斗の」
「そう、北斗の。いや別に南斗の方でもいいんだが。それとも兄の方とか……」
真雪が、かの救世主を知っていたというそれ自体が「筋肉フェチ」である証拠のような気もするが、それはあえて口にしない。
俺の憮然とした顔をどう受け取ったものか、真雪はくすっと小さく笑った。笑窪がつくるくぼみに、皮肉な影は少しも見当たらない。無邪気な少女然と、微笑んでいる。
「そういえば、笹岡くんも拳法習ってるもんね。やっぱり秘孔とか突けちゃう？」
「そんなわけないだろう。だいたい俺が習ってるのは合気道だ」
たしかに経絡の秘孔については、少々習い、ある程度知っている。だが指先一つでどうこうできるほど熟練した技は持っていない。
真雪の目は何かを期待するように大きく開かれ、楽しげに俺を見つめている。
俺はため息をついた。
「で？　話を戻すが、やっぱり真雪はああいう筋肉隆々なマッチョ

体型の男が好きなのか？」
「……別にそんなことは、ないけど」
真雪は少々鼻白んだようだ。
まさかそんな風に問われるとは思ってもみなかったというような、驚き顔をしている。
「マッチョ体型は嫌いじゃないけど、あそこまでいくとちょっと……マッチョすぎっていうか」
真雪は眉根を寄せ、微苦笑を浮かべた。
「けど、逆三角形の体型が好きみたいなこと言ってたろ？」
「うん。それは好きだよ？　鍛えられた筋肉ってキレイだなぁって思うし。だからね、笹岡くんの体もキレイだなぁって思うの」
真雪は照れるでもなく、さらりと言った。
「あのね、わたしの理想っていうか好きなのはね、笹岡くんみたいな体格なんだよ？　均整がとれてて、姿勢がよくて、無駄がなくて、しなやかなの」
「……」
俺は閉口した。
言ってて恥ずかしくないのか、真雪は。
真雪は嬉しげに微笑んで、まじろぎもせずに俺を見つめている。
「だからわたし、笹岡くんが一番だって思ってるよ？　笹岡くんの体が一番好き」
「……」
ちょっ――、今さらっとすごいこと言いましたよ、この子！？
真雪はほんのちょっとだけ顔を赤らめているが、とんでもないこと言ったとまでは気づいていないようだ。
真雪はこちらが恥ずかしくなるくらいに直球だ。ストレートすぎるほどに、ストレートだ。
――天然の破壊力は、すさまじい。
「……まいった」
俺は顎をさすり、嘆息した。

「……え？」
そして真雪は、「何のこと？」と俺の顔を覗き込んでくる。
まいったとしか言いようがない。
真雪は俺を一撃で倒せる秘孔を知っていて、無意識的に突いてくる。敵うわけがない。
俺はあたりを見回した。
本日ラストの授業が終わった、暮色に満ちた教室。いるのは俺と、真雪だけ。
廊下から、窓の外から、人の行き交う足音や談笑は聞こえてくる。だがいずれも通り過ぎ、教室の前で足を止める者はいない。半分開いている教室のドアを開け、侵入してくる者もいない。
誰も、俺達のことを見ていない。
俺だけが真雪を見、真雪は俺だけを見つめている。
窓から差し込んでくる黄金色の西日が、真雪のやや茶色みをおびた髪を照らしている。秋の落日は早い。黄昏時のまぶしい光はすぐに傾き、寒々とした影を落としてしまうだろう。
その影から真雪を守るため、というわけでもなく、ただ単に、真雪のほっそりとした身体を抱きしめたい衝動に駆られた。
そして俺はその衝動のままに、真雪の身体を引き寄せた。
「えっ、あ、の、笹岡くん……っ！？」
妙なことに、真雪は自分から俺の体にもたれてくる時はさほど躊躇もしないし、照れもしない。が、俺から触れられると、可笑しなほど慌て、身構える。
真雪の体は、華奢だ。両腕に力を込めて抱きしめたら、ポキリと折れてしまうのではないかと思うくらいに。
「笹岡くん、あの……っ」
「体、痛い？」
ほんの少し、腕の力を緩めた。
「や、痛くはないんだけど、そのっ、なんか落ち着かないよ……っ」
「真雪、落ち着く方法教えようか」

「え、えぇ？」
俺の腕の中、真雪はもぞもぞ肩を動かしている。少し乱れている髪に、指を通した。真雪の髪は指通りがいい。髪の流れるままに指を通し、それからもう一度後頭部に手をあて、くしゃくしゃと撫で付けた。
「腕、背中に回して、抱き返して」
「うぅっ、そんなの……っ」
できない、と言いかけ、だが真雪は思い直したらしい。意を決したのか、「ていっ」と気合いの声をあげ、俺の背に腕を回した。真雪の腕の長さでは、俺の背で両手が合わさることはない。それがもどかしいのか、真雪はシャツをきゅっと掴み、俺にしがみついてきた。
「笹岡くんの背中っていうか、胸、広いね。もしかしたら北斗の人と同じくらい……ううん、もっと逞しいかも？」
「……」
まさに、自滅だ。
俺は俺の仕掛けた罠に、自ら落ちた。
真雪は俺の胸に頬を摺り寄せる。仔猫が身体を摺り寄せてくるようにぴったりと。
「笹岡くんにこうしてもらってると、ドキドキするけど、すっごく安心する」
ループして、この結末に落ち着いた。
「やっぱり笹岡くんが一番」
「そうか」
「……うんとね……だから、笹岡くんがわたしの理想の人」
さすがに気恥ずかしいのか、顔を上げず、聞こえるか聞こえないかのか細い声で、真雪はそれを言った。
真雪は“衝撃”だ。他愛ない一言を放って、鼓動を速まらせる。
緩めた腕に、再び力を入れた。真雪に、こうもやられっぱなしでは情けない。

俺は“仕返し”とばかりに、真雪の耳に口づけた。赤く熱い耳の先に、そっと触れる程度のキスを。

「……っ！！」

真雪は硬直し、声すらあげられない。

どうやら俺は、一撃必殺の秘孔を見つけたようだ。

うたたね姫にショックなキスを（後書き）

“ショック”は、某アニメのオープニングソングの第一声から。このアニメ（漫画）を知らない人にはわかりづらい内容ですみませんっ

うたたね姫にいざといキスを

中原真雪、という女の子は、突拍子もない、というのが特徴だ。
外見的な特徴を挙げるなら、ぱっと見、とても大学生には見えない童顔で、笑窪の可愛い、小柄な女の子だ。目立つタイプではない。
突拍子もない、というのは性格的な特徴なわけだが、言い換えるとするなら、「天然」だろうか。
実に、「天然」だ。無邪気な顔をして、とんでもないことを口走る。
そうしていつも俺を面食らわせる。

今も、そうだ。
真雪の寝起き顔があんまり無防備で可愛く、悪戯心から、軽く、キスをした。
時は昼下がり、場所は大学の教室だったから、ちょっと触れるだけの短いキス。
真雪は突然のことに驚き、ぱっと頬を赤らめて、目を瞬かせた。
ここまでは、予想内の反応だ。ここまでは、俺にも余裕はある。
ところが真雪は、俺から体を離すことなく、上目遣いに俺を見つめ、言ったのだ。
「笹岡くんって……キス、上手だね」
「……」
一瞬、思考が停止した。
耳を疑った。
今、何を言ったかな、この子は……？
真雪の口からとんでもない台詞がこぼれ出たような気がするが……。
真雪は無邪気な顔をし、目をぱちくりとさせている。ちょっと小

首を傾げて、俺の戸惑い顔を見つめている。
「……」
俺はどう返してよいものやらわからず、頭の中で真雪の台詞を反芻していた。
いやまぁ、下手と言われたわけではないのだから、ショックを受けたということはない。が、いささか驚いた。
真雪の口から、まさかそんな台詞が出るとは……という驚きがデカい。ある意味で、ショックだ。
「……？」
真雪は、「あれ、どうしたのかな？」と不思議顔をしていたが、ややあってから、はたと気づいたようだ。
「あっ」、と声を上げ、とたん、顔を真っ赤にした。
「あ、あのっ、笹岡くん、ちがくて！　そのっ、誰かと比較して上手とかそういう意味じゃなくて！　ていうかわたし、笹岡くんのしか知らないし……！」
真雪は恥ずかしさのあまり俺に寄りかかっていた身体を離そうとしている。しかし俺は真雪を逃さない。
真雪は見ていて可笑しいほど、わたわたと慌てふためいている。耳まで赤くなって、声も上擦っている。
「上手っていうか、えぇっと、その、なんていうのかな……気持ちいいっていうか」
「……」
真雪は慌てるあまり、自らドツボにはまっていく。
俺は笑いだすのを堪えていた。ついでに、抱きしめたいという衝動的な行動をも、どうにか抑えていた。
上手にしろ気持ちいいにしろ、あまりに直截的な表現だ。
真雪は回りくどい言い方をしない。こちらがたじろぐほど、素直な気持ちを言葉に表わしてくる。それは真雪の美質だ。だが、言われる側としては、少々……いやかなり、照れくさいものがある。むろん悪い気はしないのだが、理性を保つのに苦労がかかる。

そんな俺の気も知らず、真雪はさらに続ける。
「笹岡くんの優しい目で間近に見つめられるとドキドキするな、とか、唇も柔らかくて、触れられるとさらにドキドキが倍増しちゃうな、とか、そ、そういうのが気持ちよくて、えっと、その……」
真雪は、もはや自分が何を言っているのか、わかっていないのかもしれない。早口になり、不明瞭な言葉を必死に紡いでいく。
真雪の焦り顔は、つつきたくなるほどに可愛い。
まったく真雪は、俺の予想をはるかに超えてくる。その突拍子のなさは、呆れもするが、新鮮でもある。俺はおそらく、真雪のそういうところに惹かれたのだろう。
俺はもう微苦笑を浮かべるしかなかった。
「だからね、その……、笹岡くん、上手だなっていうのは、そういう意味で」
「そういう意味？」
訊き返されるとは思わなかったようだ。真雪は肩をびくりとあげて、そのまま硬直した。「え……」と、声がもれ、その先を続けられないでいる。
「そういう意味って、どういう意味だ？」
ちょっと意地悪く、問い詰めてみた。俺の声には、隠しきれない笑いが含まれている。
それに気づいているのかいないのか、真雪は返答に困り、俺に抱かれている肩をすぼませ、それからそっと顔を俯かせた。
窓から差し込んでくる、少し黄昏の色を含ませた午後の陽光が、真雪の紅潮している頬とやや茶色みを帯びた髪、そして縮こまっている細い肩に当たっている。晩秋の陽光は、真雪をはかなげに見せた。
真雪は俯いたまま、か細い声を発した。
「つ、つまり、ね」
適当なことを言って、曖昧にごまかしてしまえばいいものを、真雪は真摯に応えようとする。

「……笹岡くんの肩って寄りかかっていると安心できて、気持ちよく眠れるんだけど、笹岡くんが……その、してくれるキスって、それと同じくらいに気持ちよくて。でも、気持ちいいけど、眠れなくなっちゃうから、その……笹岡くんはわたしの目を覚ますのが上手だなって。えぇっと、そ、そういう意味でっ」

ここまで告白されて、何もせずにいられるだろうか。

真雪は真っ赤になっている顔を両手で覆い隠し、身体を縮こまらせ、硬くなっていた。

「も、もうっ、なんだか恥ずかしいこと言っちゃったよ、どうしようっ」

「どうしようもないな」

くすっと小さく笑ってから、俺は真雪の顎を掴んで、半ば強引に上げさせた。

俺が起した、「うたたね姫」。

せっかく目覚めさせたのだ。もう眠らせたくはない。

だからもう一度。いや何度でも。

うたたね姫に、目覚めのキスを。

うたたね姫にいざといキスを（後書き）

いざとい→目が覚めるのが早い、とか、めざとい、とかそんな意味です。漢字だと「寝聰い」と書くようです

うたたね姫とたゆたうユメを（前書き）

本編直前のとある日の事。

うたたね姫とたゆたうユメを

茨(いばら)に守られた森の奥、やわらかなベッドの上で横たわり眠り続けるお姫様は、はたしてどんな夢を見ているのだろうか。

――その夢から覚めることを、望んでいるのだろうか……？

中原真雪という女の子と“再会”し、さらには「わたしの枕になって」という突拍子もない頼み事を告げられてから、半年近くが経つ。

枕、といっても、膝枕でもなければ腕枕でもない。肩というか、腕に凭れかかられているというのが見た目的に正しいだろう。

不安定なその姿勢ではたして安眠が得られるものだろうかと、肩を貸している俺は純粋に疑問に思っていたが、うたた寝をしている当人は、いたって気持ちよさげな寝息をたてている。安らいだ寝息が、俺の素朴なる疑問の、端的な答えなのだろう。

中原真雪という女の子は、俺にとって疑問の塊だった。様々な疑問がふつふつと心の内に湧き上がってくる。疑問の形が明確なものであれば、それを彼女に問うこともできたが、ほとんどの疑問は、自分自身ですらよく分からない不確かな感情で、何をどう問うべきなのかも判断がつかなかった。

とりあえず、一番の疑問は、

「どうしてそんなに、いつでも眠たいのか」

ということだ。それを彼女に訊くと、彼女自身もはっきりとした答えを持っていないのか、はにかむような笑顔を浮かべて、「眠るの好きだから」と曖昧に答えた。

「眠る前のね、ふわっとした感覚が好きなの。もちろん寝てる間中も、ふわふわしてる感じが気持ち良くて、いつまでも寝ていたくな

っちゃうの。笹岡くんに凭れかかってると、とくにそういう気持ちいい感覚になれるんだよ？　ほんとに笹岡くんの肩って、すっごい安眠威力があるの！」
「安眠威力って、どんなだよ……」
呆れた風に苦笑して返すと、彼女は「それはね」と少しばかりムキになったような顔を向けてきた。童顔の彼女は、眠っていても笑っていても真剣な顔をしていても、子供っぽい表情が抜けきらず、こちらが戸惑ってしまうほどに、そのあどけなさが可愛く映る。
「安眠を誘う癒しのパワーっていうのかなぁ。肩や腕…ううんそれだけじゃなくて、全身の筋肉に言えることなんだけど、笹岡くんの体の筋肉って、程良い弾力があって、無理がなくて柔軟で、守ってくれそうな、そんな感じがするの。そういう、安心な“威力”なの」
そう言って、彼女はえくぼを見せて、無邪気に笑う。
照れもなく、さらりと褒め言葉を口にするのは彼女の美質ともいえるが、真っ向から褒められると、こちらとしては気恥ずかしさのあまり、閉口してしまう。
こういう時俺は、黙然として眉間に皺を寄せ、ため息をつくしかない。
「夜、お布団に入ってちゃんと寝るのも好きなんだけど、うたた寝って、それとは違う気持ち良さがあるの」
友人らと一緒にいる時の彼女は、どちらかといえば聞き役に回ることが多い。が、好きなことに関しては、どうやら饒舌になる性質のようだ。ちょっと早口になり、慌てたように話す。気持ちを伝えようとする懸命さがそうさせるのだろうか。彼女の俺に対する口のきき方は、少々ぎこちないところがある。それでも表情に硬さはなく、大抵は和やかに微笑んでいる。それでいて、ふと不安げな顔をし、遠慮がちに俺の心意を窺ってくる。
「あ、でも。やっぱり笹岡くん……迷惑？　もしそうなら、わたし……」
「いや、別に迷惑じゃない」

彼女の不安を払うためにも、きっぱりと答えた。むろん、それは本心でもある。
正直言えば、周りの目が少々気になりはするが、それにもだいぶん慣れてきた。
彼女は「よかった」と微笑し、ほっと胸を撫で下ろした。彼女は他愛ない。他愛なさすぎるといってもいいくらいだ。彼女は、良くも悪くも無頓着すぎる。
彼女のその無頓着さ、ある種の傍若無人さに呆れつつも心配しているのは、彼女の親友の岡崎さんだろう。

「ねぇ、笹岡くん、ちょっと訊きたいっていうか、確認したいんだけど」
その岡崎さんから声をかけられた。珍しく横に中原真雪がいない。中原がいないという状況で岡崎さんから声をかけられるのは、これが初めてかもしれない。
「笹岡くんってさ、彼女いる？」
突然、何の前置きもなく、岡崎さんが聞いてきた。
「は？」
「だからさ、つきあってる彼女いるのかって訊いてるんだけど」
岡崎さんの問いは、直球だ。
これを訊いたのが中原真雪という女の子の親友ではなく、そして呼びかけられた場所が、人の往来の多い真昼のキャンパス内のカフェ近くではなく、たとえば人の少なくなった放課後の教室だとか階段の踊り場だったなら、あるいは「告白タイム」かと周囲にいる目撃者に誤解されそうなものだが、岡崎さんの口調にも表情にもそういった色めいたような雰囲気はなかった。俺にしてもそれは同様で、ただ少し驚き、そのせいで返答が遅れてしまった。
「いや、いないけど」
「そーよねぇ。うん、よかったわ」

岡崎さんは心底ホッとしたようにため息をついた。
一方で、俺の眉間には皺が寄っている。いったい何なのだと問い詰めるような目を無意識的に岡崎さんに向けてしまっていた。岡崎さんはすぐにそれに気付き、不躾を詫びてから、話を継いだ。
「笹岡くんに今彼女いなくてよかったっていうのはね、マユのことがあるからなの」
「え？」
マユ、つまり中原真雪の名が出て、俺はぎょっとし、息をつめた。
敏活な岡崎さんは、狼狽した俺の顔色から「何か」を感じとったらしい。俺の気のせいだと思いたいが、岡崎さんの切れ長の一重瞼の下の瞳が、キラリと鋭く光った。
だが岡崎さんはその「何か」をあえて追求しようとせず、何食わぬ顔で話の先を続けた。
「もし笹岡くんに彼女がいたとしたら、マユってすごく迷惑な存在じゃないかって思って。そうでしょ？　彼女でもないのに、あんな風に密着するのって不自然だし」
「……ああ、まぁ、そうかもな」
「う～ん、そう返されるとは予想外。笹岡くんも、案外そういうこと疎い？」
岡崎さんの口調にも表情にも、呆れたような色がありありと表れている。
俺は苦笑して、ちょっと言い訳っぽい気もしたが、言葉を足した。
「実際彼女がいたら、迷惑とかいう以前に、断ってるよ。いくら俺でもそこまで疎くない」
「そっか。そうだね、ごめん、疎いなんて言っちゃって。マユがそういうことに疎いから、そのマユに付き合ってるうちに笹岡くんも感化されちゃったのかとか、勝手に思い込んじゃってた」
「感化はされてるかもしれないな。自分じゃよくわからないが」
そう言うと、岡崎さんは少し気難しげな顔をして、両腕を組んだ。
「マユってヘンな影響力あるじゃない？　悪い影響力じゃないから

いいんだけど、ただ傍から見てると、それがちょっと心配っていうか。自分は周りに知らず知らずとはいえ影響を与えてるくせ、自分は流されることがないのよね。いつまでも同じ場所で暢気に寝こけてるって感じで。なんかちょっとずるいなぁって思うわけよ。いつまでも変わらないで、のほほんとしてて、だけどそれが自然で」

「辛辣だな」

「事実だもの」

俺と岡崎さんは顔を見合わせ、笑った。

岡崎さんの口調に陰口めいたところはなく、親友の身を案じる心緒を、思わずこぼれ出てしまうため息にも、感じられる。事態を面白がっている風ではあるが。

「だからね、マユになんて言って説明していいのか分からないんだよねぇ。一度は、笹岡くんに密着しすぎるのはほどほどにしときなよって言ったんだけど、マユは不思議そうな顔するばっかだし。笹岡くんには迷惑じゃないかってちゃんと確認したよ、なんてのほほん顔で言うんだもんなぁ。そういうことじゃないでしょっていうのにさ」

たしかに、彼女の行動は傍から見ているととんでもなく突飛で、人によっては迷惑極まりないと感じとられてもしようのないものかもしれない。

ところが、我ながら不思議なのだが、当事者である俺は、彼女の行為……すなわち、俺に凭れかかってのうたた寝だが……に関して、ただの少しも迷惑に思ったことがないのだ。ただ少しばかり戸惑うだけで、不快な気分になったことは、初めての時から今まで、ただの一度もない。

岡崎さんは、どうやら俺のその不可思議な感情を察知しているようだ。女特有の勘とでもいうのだろうか。

「でもね」

岡崎さんは含み笑って俺を見る。

「近頃ちょぉっと変わってきてるみたいなのよね。変わらないなっ

て思ってたけど、ちょっと変化が出てきたかな、みたいな。本人に自覚はないみたいだけど。笹岡くんはどう思う？」
「……」
俺は返答に窮した。中原真雪の、何がどう変わってきているのか。そしてそれをどう思うかと問われても、答えようがない。どうしてそんなことを訊くのかと岡崎さんに訊き返すのですら躊躇われた。
岡崎さんは興味深げな目をして俺の顔色を窺っている。俺はできるだけ表情を動かさずにいるのだが、うまくできているかどうか、自信はなかった。

――ところで、「噂をすれば影」という言葉がある。
「りこちゃん、笹岡くん。何を話してるの？」
その「影」が、ひょこっと顔を出した。顔や声音に僅かな影も見られないその明るい「影」中原真雪は、大きな瞳を興味深げに瞬かせ、内心の動揺を必死で隠している俺と、突然の出現に少々驚き、けれども慌てた様子をちらりとも見せない岡崎さんを、じっと見つめている。
中原は岡崎さんの腕を引っ張るようにして掴み、小首を傾げた。少し茶色みを帯びた柔らかい髪が、華奢な肩の上でふわふわと揺れている。
岡崎さんは「ああ、びっくりした。おどかさないでよ」と笑い顔で応じてから、こともなげに言葉を継いだ。
「マユのこと話してたのよ。眠ってばっかの、マユのこと」
「え、わたし？」
「そ。いつまでも寝てばっかいないで、そろそろ起きたらいいのにねぇって」
「……わたし今、起きてるよ？」
中原はきょとんとしている。岡崎さんはちょっと悪戯っぽく笑って片手を腰に当て、もう片方の手を中原に向けて伸ばし、ぴしっと人差し指を立てた。

「それじゃぁマユ、今日くらいはそのままずっと起きてなさいよ？　たまにはそういう日があってもいいでしょ？　てゆーか、いつもが寝すぎなんだけど。それと！」
中原は岡崎さんの迫力に気圧されて、肩を竦ませている。それは俺も同じで、口を挟む隙も余裕もなかった。
「いつも笹岡くんの肩に凭れかかってお世話になってるなぁありがとうって気持ちがあるんなら、コーヒーの一杯くらいおごってあげたら？　感謝の気持ちに品物添えてってのは、一般常識だよ？」
いやいやいや、そんな一般常識ないですから、という俺の突っ込みはかるーく受け流された。岡崎さんは澄ました顔をしている。岡崎さんの言葉を信じたとも思えないが中原は真摯な顔をして、頷いた。
「うん、そうだね。そうだよね。言葉だけじゃ伝わりきれないってこともあるよね。笹岡くんのおかけでいつも気持ち良くうたた寝できて、ほんと感謝してる。だから、何かおごらせて？　コーヒーでもなんでも、笹岡くんの好きな物があれば。……ね？」
ね？　と、えくぼを見せて笑い、小首を傾げて俺の顔を覗き込んでくる。中原のそのあどけないといっていい仕草には、本人は無自覚なのだろうが、断りきれない押しの強さがある。
俺はやれやれと肩を少し上げ、ため息をついた。苦笑未満の微笑が口元を緩ませる。
「それじゃぁ、言葉に甘えるとしようか」
俺がそう言うと、中原は嬉しげに笑った。今日の、好く晴れた秋空のように、明るく眩しいほどの笑顔だ。
「うん、どんと甘えて！」
その様子を、岡崎さんは「単純ねぇ」とでも言わんばかりの呆れ顔で見やっている。
まぁ、たしかに中原真雪という女の子は、単純だ。見ていて微笑ましくなるほど、素直に気持ちを顔に表す。
「それで、何にする、笹岡くん？　今日はわたし、太っ腹だからね。

りこちゃんにもおごっちゃう」
「やった、ラッキー。じゃあたしは、アイスミルクティーね」
「笹岡くんは？」
中原の「うたた寝」顔以外の、今こうして俺に向けられる朗らかな笑顔が新鮮だった。少し、胸が熱くなったような。奇妙に落ち着かない気分だが、……悪くはない。
「そうだな、俺は」
顎に手を当て、ちょっと考える風に目線を上向けた。それからすぐに視線を中原に戻し、答えた。
「眠気覚ましの、コーヒーを」

――もう少し。あともう少しの間、このままでもいいような気はしている。
うたた寝をして、まどろんで、曖昧な夢の中でたゆたっているのも悪くはない。
いずれ目覚める時は来るのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9543s/

うたたね姫に目覚めのキスを

2011年5月15日23時11分発行